



342  
877

ライ・レーニン著

佐野文夫譯

(レーニン重要著作集)

# 帝國主義戰爭

東京 白揚社 出版

# 始



特216  
610

レ  
ー  
ニ  
ン  
著  
佐  
野  
文  
夫  
譯

(レーニン叢書第十篇)

帝國主義戰爭

東京白揚社刊



## 緒言

本巻に収録せる論文は、一九一四年九月から一九一七年四月までの間、レーニンがスキスに亡命中に黨機關紙に發表せるものである。レーニンは世界戦争勃發まではジノヴィエフと共にガリシアに滞在して、國外から黨を指導してゐたが、一九一四年八月開戦と共にガリシアを追はれて、九月にスキスに移り、一九一七年三月革命の直後までこの地に留まつて、ボリセヴィキ中央機關紙『ゾチアル・デモクラット』を發行し、中央委員會首腦として黨の活動および政策を指導してゐた。世界戦争の勃發は世界の労働者運動に廣汎にして深刻なる影響を與へ、各國の労働者運動は日和見主義者と革命的マルクス主義者との二つの陣營に分裂し、謂はゆる數十年の『平和期』の間安泰に持續してきた第二インタナショナルは茲に死んでしまつた。

この國際的日和見主義、排外社會主義の潮流に對して斷乎として宣戦したものは、獨りレーニンおよびその指導の下にあるロシア社會民主労働者黨(ボリセヴィキ)あるのみであつた。レーニンは『ゾチアル・デモクラット』に據つて、この戦争の帝國主義的本質を解剖し、かゝる性質の戦

争に對する無産階級の任務および戰術を説き、日和見主義に對して痛烈なる批判を加へて新しきインタナショナルの結成のために戰つた。最初はスキスの一角から孤獨に叫ばれてゐた聲が、漸く各國の無産階級の間へ反響を見出し、一九一五年九月に帝國主義戰爭反對の國際主義者のチンマーワルト會議が催され、謂はゆる「チンマーワルト左翼」の國際的團結を見、これが核心となつて、遂に一九一七年九月ストックホルム會議において第三インタナショナル結成の決議を見るに至つたのは周知のことである。

本卷に収録せる論文は、世界戰爭の開始よりロシア三月革命に至るまでの、ボリセヴィキの最も困難にして最も光輝ある時期の闘争の所産であると同時に、世界史上に新紀元を劃したる十一月革命および共産黨インタナショナルを産み出すための基礎工事を成すものであつて、本書の内容を知らずしてはこの兩者の歴史的必然的發展を理解することはできないであらう。

本卷の大部分を形成してゐる上篇は、右の時期に發表された論文を革命後に單行本にまとめて發行されたレーニン『ジノヴィエフ共著』『潮流に逆つて』（共産黨インタナショナル出版部刊行、ハンプルグ、一九二一年）から採録したものであるが、そのうち左の三つの論文は編輯の都合上本

卷から除いて他の卷に収録することにした。

『第二インタナショナルの崩壊』（一九一五年、『コムエスト』第二二號所載。）

『民族自決權に關する討論の結果』（一九一六年十月、『ソチアル・デモクラット合集』第一號所載。）

『社會主義の分裂と帝國主義』（一九一六年十月、『ソチアル・デモクラット合集』第二號所載。）

即ち右の第一論文は第六卷に收められるものであり、第二および第三の論文は既に第二卷に收められてゐる。なほ右の外に、

『市民戰爭の標語の例證として』（一九一五年三月二十九日、『ソチアル・デモクラット』第四〇號所載。）と題する小論文は、檢閲に對する顧慮から省略するの止むなきに至つた。

いま上篇に收めた諸論文の性質内容を一層明瞭ならしむるために、『潮流に逆つて』の著者の言葉を採録する。レーニンは卷頭に次ぎの如き序言を書いてゐる。

### 『潮流に逆つて』序言

レーニン

『茲に集めた論文の多數は、一九一四年末から一九一七年初までの間スキスで發行された』

チアル・デモクラット』(ロシア社会民主労働者黨ボリセヴィキ中央機関紙)に發表されたものである。たゞ一つの比較的長い論文だけは、雑誌『コムニスト』(一九一六年スキスで一回だけ發行された)から収録せるものである。

個々の論説間の聯絡について正しい理解を與へるために、雑誌に發表した年代順を尊重しなければならなかつた。

論文は二つの基本的範疇に分れてゐる。一部分は戦争に對する判断と、そこから生ずるところの、政治的任務の評価とに宛てられてゐる。他の部分は黨内の事情と諸分派の闘争とを扱へるものである。この闘争は短見者には久しく『混乱』または『個人的軋轢』のように見えたものであるが、實際上には、今日各人が認めてゐるように、本統の社会主義者とブルジョアジーの従僕、即ちリーベル、ダン、マルトフ諸君およびその一味との限界づけを誘致したのである。

もちろんこの論文集の一つの部分、または一つの範疇の方に、著しく大きな意義がある。國際的社會主義××の觀念と、一九一七年十月二十五日(西曆十一月七日)におけるこの革命の最初の勝利との發展を理解せん、と欲する階級意識ある労働者は、これらの論文の知識なくしては

やつて行けないであらう。』

次にジノヴィエフは『序言に代へて』を書いて、當時の事情を具さに回顧してゐる。その中の直接必要な部分を抜萃して左に掲げる。

『こゝに収録せる論文は同志レーニンおよび予が、一九一四年九月から一九一七年二月までの亡命期の間に執筆せるものである。吾々はガリシアで戦争の勃發に出會はした。著者は當時できるだけロシアの國境の近くにゐて、當時ペトログラードで發行されてゐた『ブラウダ』に働く可能性を得るために、ガリシアに住んでゐたのである。吾々は苦心の結果漸やく中立國スキスに到着することを得て、その地で再び『ゾチアル・デモクラット』(當時のわが黨の中央機関紙)の發行に着手し、續いて雑誌『コムニスト』を一號、『ゾチアル・デモクラット』合集を二冊發行した。

『茲にそれらのうちの最も重要な論文を變更を加へずに収録する。……』

『潮流に逆つて!』——吾々の論集はこう命名されてある。吾々は排外社会主義に對する闘争を小さなグループとして始めた。祖國擁護の濁浪が萬國の労働團體を席捲し、ドイツではカー・リープクネヒトすらまだ公然と戦費に反對してゐなかつた當時に、吾々はこの闘争を起したのであつた。

チンマーワルトにおいて初めて吾々は、他の諸國の斷乎たる國際主義者の小群と一諸に、國際主義者の最初の緊密な核心を創造することを得た。當時チンマーワルト左翼は數的には極く僅かな勢力であつた。そして當時ロシア國際主義の代表は、大衆から遊離せるグループとして、幾分でも大きな労働大衆を代表してゐない亡命者のサークルとして、評價されてゐたといふことを、こゝで公然と言つて置きたい。しかし事件が進展するにつれて、事實はそうではなかつたこと、當時すでに吾々は疑ひもなくロシア・プロレタリアートの最も廣汎な範圍の眞の聲を表現してゐたこと、當時すでに吾々はロシアの階級意識ある労働者の最良部分の眼前に泛んでゐた方向の根本的特徴を表示してゐたことが立證された。(中略)

『開戦當初は吾々の聲は寂寞たるものであつた。ロシアからの反響は極く僅かしか遠い流瀆の

地に届かなかつた。『祖國擁護』の觀念も矢張り最初にわが國に頭を擽げた。ブルジョアジーと最も目先のきくツァーリズム追隨者とは、わが『祖國擁護者』をあらゆる方法で以て勵ました。ロシア社会民主労働者黨の幹部、亡命者の間には間もなく新たな分布替えが認められるようになった。ブレハノフは最も熱狂的な愛國主義者の列伍の中に移つて行つた。最初のうちは吾々はそれを信じまいとした。ブレハノフがニコライ・ロマノフのたくらんだ戦争における『祖國擁護』の信奉者だといふ噂が、どの程度まで眞であるかを確かめるために、同志レーニンと予とがわざわざローザンヌに旅行して、ブレハノフ氏と最初の會見をしたことを思ひ出す。吾々はブレハノフの言を聞いたときは自分の耳を信ずることができなかつた。しかしローザンヌにおける此の會見後は、ブレハノフ氏が社会主義にとつて失はれた人間となつてしまつたことを吾々は明かに知つた。そしてこの事實は、この戦争の惹き起した社会主義の危機がどんなに大きなものであるかを繰返へし繰返へし吾々に示した。吾々は心に言つた、ブレハノフがそれほどまでになつたとしたら、ドイツでシャイデマン一味がこんなに墮落してゐるのは少しも不思議ではないと。

ついでに新たな種類が現はれた。フランス労働者の老指導者ゲードが、フランス帝國主義の代理人の仲間入りをした！ あのように永らくの間『社會主義者入閣主義』に對して戦つてきたゲード、このゲード自身が、帝國主義的掠奪的戦争を行つてゐる政府の閣僚となつてしまつた。

ゲードから今度はカウツキーだ！ カウツキーはその文筆的活動の全盛時代には革命的マルクス主義にあんなに多大の貢献をしたのに、遂にそのマルクス主義の從來の陣地を去つたことを、開戦の數年前において既に文筆的活動によつて示してゐた。カウツキーが、吾々の記憶にして間違つてゐなければ一九一〇年に書いたパンフレット、『權力への道』は、生粹の革命的マルクス主義の理論家としてのカウツキーの辭世であつた。爾來カウツキーは九天直下の勢ひで轉落した。彼れは革命的マルクス主義と日和見主義との間の『中道』を辿らうと努めた謂はゆる『中央派』を形づくつた。『バーデンとルクセンブルグとの中間』——新聞でカウツキー自身が自分の態度をそう特徴づけた。バーデンはドイツ日和見主義の中心點である。マルクスの故郷(トリエール)はバーデン公國とルクセンブルグ國との中間に存在してゐる。カウツキーはそれ

によつて、自分の態度は日和見主義の『腫物』をも、左翼——ドイツにおけるその代表者は同志ローザ・ルクセンブルグである——の『極端派』をも、同じ程度に斥けると言はうと欲したのだ。ローザ・ルクセンブルグとその集團を『アナルコ・サンチカリスト的集團』と見做さんとするカウツキーの企圖が、如何に不當であり、如何に大間違ひなものであつたかは、開戦以來の歲月が明瞭に示してきたところである。同志ルクセンブルグの集團こそはドイツにおける革命的マルクス主義の萬全の礎であり、どこまでもそうであることを、開戦以來の歲月は分明に示してきた。

讀者はこの論集を繕いて、吾々が一九一四——一七年の期間における文筆的活動において、『中央派』の克服、殊にカウツキーの文筆的活動を特に多く取扱つたことを認めるであらう。それはまた不思議なことではない。吾々はこれは全然この期間における國際的社會主義の地位から生ずるものであると信ずる。すでに一九一二年にローザ・ルクセンブルグが言つたことがある、今日修正主義との理論的闘争が無駄骨折りになるとすれば、それは只マルクス主義的『文字』のかけにかくれてゐる修正主義との闘争だけだと。そしてカウツキーの見解こそは實に『マルク

ス主義的』文句の假面をかぶつた修正主義以外の何ものでもない。労働者運動の危急存亡の時期に當つて『中央派』の政策がもたらした害は特に大きなものであつた。あらゆる方面から吾々に向つて叫ばれた、ゲ、ド、カウツキ、ブレハハフといふような人々が今日×××××の原則を奉じてゐるとすれば、一體如何なるものが日和見主義で、如何なるものが社會主義の裏切りなのか？ 舊インタナショナルの舊代表者中の權威がブルジョア政策を歓迎してゐて、ドイツではシャイデマン一味、フランスではルノーデル一味、イタリアではムソリニ一味、オーストリアではヴィクトル・アドラーおよびレンナーがこの政策をわがものとしてゐる。これらの最も有力な敵を征服することが必要であつた。舊來の名聲を足場としてマルクス主義を最も厚顔無耻に歪め、労働者を無理やりに祖國擁護の束縛の中に捉致した者共の化けの皮を剥ぐことが必要であつた。(中略)

『しかし段々チンマーワルト左翼に、萬國の社會主義者、國際主義者の同情が向つてきた。チンマーワルトにおける第一回の會議では、同志ラコフスキーの如き指導者、それに同志ローラント・ホルストですらも吾々に反對であつた。チンマーワルトに同志セラチによつて代表され

たイタリア國際主義者は、この第一回のチンマーワルト會議では矢張り吾々に或る種の反對をした。ドイツの社會主義者、國際主義者のうちでは、一人の代議員が即座に吾々に與みただけで、他は漸く段々に吾々の方に接近してきた。ペー・アクセルロッド、エル・マルトフ、その他當時國外に住んでゐた知名のメンセヴィキは、その多年の連繫を利用して、他國の社會主義者の間にチンマーワルト左翼を不信用ならしむるにつとめた。彼れ等はロシアからの惡意ある報導によつてそれを實行したために、西歐の穩健な社會主義者、國際主義者の多くは、ロシアでは労働者の多數派は國際主義者に従はず、高々『中央派』の政治家に従つてゐるだけだといふ作り話を信用してゐた。一九一七—一八年の出來事が初めて吾々の希望してゐるように、ロシアの労働者は本統に何人に従つてゐたかといふことを、究極的にわが同志の間に示したのである。帝國主義戦争を×××××すること——これが開戦と同時に吾々のかゝげた合言葉であつた。舊來の社會主義の代表者は、この合言葉に耳を藉さうと欲しなかつた。ローベルト・グリュムがわが中央委員會の第一回の戦争聲明書を發表することを拒絶し、現在帝國主義戦争の×××××を語るのは——『無政府主義』だと放言したのを、吾々はまだ鮮やかに記憶してゐる。



潮流に逆つて戦ふことが必要であつた、眞に艱難な事情の下にあつて最初の開拓を始めることが必要であつた。(中略)

『吾々が開戦以來二ヶ年の間にロシアから得た報知は極く稀れであつた。ペトログラードおよびモスコで發行されてゐた違法新聞は、最大の骨折りを以て手に入れることができた。當時ロシアで働いてゐた黨の同志と話し合ふことは益々困難になつて行つた。剩へホンの一寸した通信や印刷物がロシアから届くのものも數ヶ月を要したのである。この戦争がロシアではツァーリズムの没落を意味することは、吾々には當初から動かすべからざる眞理であつた。しかし一九一五年末になつて初めて、×××危機が非常に迅速に進行しつゝあることを示した最初の報道がロシアから届いた。一九一五年十月には、近づきつゝあるロシア革命の輪廓が初めて多少とも明瞭になつた。讀者はこの書の第二九一頁(本書第二四一頁)の『若干の論策』<sup>アイゼ</sup>といふ論文に注意していただきたい。こゝに吾々は、わが黨が××××××××××××××××××としたら如何なることを爲すだらうかといふ問題を初めて提出してゐる。多くの人はわが黨が××××××××××××××××××などといふ見込みは極めて有り相にもないことだと考へてゐた。西歐ではわ

が政治的反對者はこういふ問題の提出を一笑しただけにすぎず、この戦争中における××××××××××××は、彼れ等にはそれほどまでに有り得べからざることにように見えたのであつた。然るに出來事は懷疑者および不信者でなく吾々の方が正しかつたことを立證した。』(下略)

本巻の下篇には、同じくスキス亡命中に執筆された論說中、『潮流に逆つて』に収録されてゐないものを集め、オイゲン・レーウィン||ドルシユ編纂、レーニン||トロツキー論文集『戦争と革命』(チューリヒ、一九一八年)を翻譯の底本とした。但し本篇の最後に收めた『社會主義と戦争』はジノヴィエフとの共著である。

なほ附録の宣言および決議文は、右の『社會主義と戦争』(パンフレットとして發行された)の序言によつても知られる通り、本來このパンフレットそのものゝ一部を構成するものであるばかりでなく、レーニンが主としてその起草に當つたものである。

## 帝國主義戰爭 目次

### 上 篇

社會義インタナショナルの地位および任務（一九一四年十一月）……………	三
戰爭に關する或るドイツ人の聲（一九一四年十二月）……………	一五
死せる排外主義と生ける社會主義（一九一四年十二月）……………	一九
インタナショナルと『祖國擁護』（一九一四年十二月）……………	三五
大ロシア人の民族的誇について（一九一四年十二月）……………	四七
今や如何（一九一四年十二月）……………	五七

ロシアのジューデクム派(一九一五年二月).....	七三
如何に警察および反動派がドイツ社會民主黨の統一を擁護してゐるか(一九一五年三月).....	八七
ロンドン會議について(一九一五年三月).....	九三
ロシア社會民主労働者派に關する裁判は何を立證したか(一九一五年三月).....	九九
ロンドン會議の機會に(一九一五年三月).....	一一一
排外社會主義者の詭辯(一九一五年五年).....	一二七
インタナショナル主義者の合同問題(一九一五年五月).....	一二七
ブルジョア博愛主義者と革命的社會民主黨(一九一五年)	

五月).....	一三五
ブラトンのインタナショナル主義の崩壊(一九一五年五月).....	一三九
排外社會主義者との闘争について(一九一五年六月).....	一四九
帝國主義戦争における自政府の敗北について(一九一五年七月).....	一五九
ロシア社會民主黨の事情について(一九一五年七月).....	一七一
ヨーロッパ聯邦の標語について(一九一五年八月).....	一八三
一フランス社會主義者の正直な聲(一九一五年).....	一九一
イタリヤにおける帝國主義と社會主義(一九一五年).....	二〇七
第一歩(一九一五年十月十一日).....	二二五
一九一五年九月五―八日國際社會主義會議における	

革命的マルクス主義者（一九一五年十月）	……三三七
若干の論策（一九一五年十月）	……二四七
革命の二つの方針について（一九一五年十一月）	……二五五
どん底にて（一九一五年十一月）	……二六七
國際主義的言辭を以てする排外社會主義政策の粉飾	
（一九一五年十二月）	……二七一
組織委員會およびチヘイゼ派は獨自の方針を有するか	
（一九一六年二月）	……二八七
ロシアのための日常合言葉としての無併合平和と	
ポーランド獨立とについて（一九一六年二月）	……二九一
ウィルヘルム・コルブとゲオルヒ・ブレハノフ	

（一九一六年二月）	……三〇七
『平和綱領』について（一九一六年三月）	……三二一
單獨講和について（一九一六年十一月）	……三二七
全體で十名の『社會主義』大臣（一九一六年十一月）	……三四五
世界政策における一轉向（一九一七年一月）	……三五一
ユニウス・プロシユールレについて（一九一六年十月）	……三六九
『軍備撤廢』の標話について（一九一六年十月）	……三九七

下  
篇

日和見主義と第二インタナショナルの崩壊（一九一六年）	……四一七
スミス労働者に對する告別の手紙（一九一七年四月）	……四四一

社會主義と戦争（一九一五年八月）……………四五五

### 附 錄

ロシア社會民主労働者黨中央委員會宣言

（一九一四年十一月一日發表）……………五二八

ロシア社會民主労働者黨外團體ベルン會議決議文

（一九一五年三月）……………五四三

帝國主義戦争 佐野文夫譯

社會主義インターナショナルの地位  
および任務

一九一四年十一月一日。(『ソチアル・デモクラット』第三三號所載)

現在の戦争において　ものは、ヨーロッパ社会主義の大多数の公けの代表者に對する、ブルジョア民主主義並びに排外主義ショレヒニズムの勝利である。あらゆる國のブルジョア新聞が吾々を嘲弄するか、吾々を愉快げに賞讃するかしてゐるのは理由がなくはない。社会主義者としてとゞまらうと欲する人々にとつては、社会主義の　を闡明し、インタナショナルの　すること以上に重要な任務はない。

第二インタナショナルの危機、といふよりも崩壊は、日和見主義の崩壊であるといふ眞理を認めることを憚つてゐる人々がある。

人々はたとへばフランス社会主義者の間に意見の一致が行はれてゐることや、戦争に對する態度の問題で、社会主義内の舊來の分派の間に、外見上完全に分布替えが行はれてゐることを指摘する。しかしこの指摘は間違つてゐる。

階級協調を主張すること、社会主義變革と××的闘争方法の觀念を棄てること、ブルジョア民主主義へ順應すること、民族または××の限界が歴史的・一時的のものだといふ觀念を抛つこと、ブルジョアの合法主義を偶像に祭り上げること、「人口中の廣汎なる大衆」(實は小ブルジョア團)と衝

突することを惧れて階級的立場並びに階級闘争を斷念すること——これが疑ひもなく日和見主義の精神的基礎なのである。取りも直さずこういふ土臺から、第二インタナショナルの大多数の指導者の今日の排外主義的、愛國主義的な氣もちが生じたのである。彼れ等の間に日和見主義者が事實上勢力を占めてゐることは、すでに種々様々の方面から、種々様々の觀察者によつて認められてきてゐる。戦争は單にこの勢力の規模を、特に急速且つ鮮明に曝露したに過ぎぬ。危機が非常に激烈であるために、舊來の分派の間に幾多の分布替えが行はれたのに不思議はない。だが一般にはこの分布替えは單に人物の上だけのことであつて、社会主義内の諸流派は依然として舊と變りがないのである。

フランス社会主義者の間には何等完全な意見の一致が行はれてゐない。ゲード、ブレハノフ、エルヴェ等と共に排外主義的方向に赴いてゐるヴァイヤンですら、この戦争は帝國主義戦争であること、フランスのブルジョアジーも他國のブルジョアジーと等しくそれに責任があることを述べた書簡を、反對派のフランス社会主義者から受け取つたことを承認せざるを得なかつた。こういふ聲は管に勝ち誇つてゐる日和見主義のみならず、軍事檢閱官をも沈黙させるものであることを忘

れてはならぬ。イギリスではハインドマン一派(英國社會民主主義者團、ブリテン社會黨)が排外主義に墮ちた。労働組合(トレド・ユニオン)の大多數の半自由主義首領連もそうである。排外主義に対する反対派を成してゐるものは、日和見主義『獨立労働黨』中のマクドナルドとケヤ・ハーディーとである。これは眞に常則中の一例外である。だが永らくの間ハインドマンに對抗して戦つてきた若干の革命的な社會民主主義者は、今日ブリテン社會黨から脱退してゐる。ドイツでは光景は明瞭である。即ち日和見主義者が勝利を獲て、勝ち誇り、いゝ氣になつてゐる。カウツキーを先頭とする『中央派』は日和見主義にまで顛落して、大嘘つきの、古くさい、ひとりよがりの詭辯で以て日和見主義を辯護してゐる。革命的社會民主主義者の中からは、ドイツ並びにドイツ系スキスにおいて、メーリング、パンネケック、カール・リーブクネヒト、並びに幾多の無名の士の抗議(プロテスト)が聞えてゐる。イタリアでも同様な類別を見る。極端日和見主義者のピソラーチ一味は『祖國』に左袒し、ゲードー—ヴァイヤン—エルヴェに左袒してゐる。『アヴァンチ』紙を先頭とする革命的社會民主主義者(『社會黨』)は排外主義と戦ひ、主戦論のブルジョア的、利己的性質を曝露して、進歩的労働者の大多數の支持を受けてゐる。ロシアでは解黨派(リキヤトール)の陣營から出た極端日和見主義者は、すで

に論文や新聞雑誌で排外主義擁護の聲を揚げてゐる。ペー・マスロフやエー・スミルノフは祖國擁護の口實の下にツァーリズムを擁護し、(思ふにドイツは『劍の力』で嚇かして、『吾々』に通商條約を強むたのに反して、多分、ツァーリズムは劍の力、笞の力、絞首臺の力でロシアの人口中の九割の經濟的、政治的、國民的進歩を鎮壓してゐないのだらう!)そして社會主義者がブルジョア反動内閣へ列するのを是認してゐる、そして今日は××××の協賛を是認し、明日は軍備擴張の協賛を是認するのだ!! プレハノフは國民主義に走り、彼れのロシア排外主義を親佛主義で以て隠蔽してゐる。アレキンスキーもその通りだ。フランスで發行されてゐる新聞『ゴロス』を信頼すれば、マルトフは最も立派にこゝいふ仲間から身を持してゐて、ドイツの排外主義にもフランスの排外主義にも反対すれば、『フォルウェルツ』紙とも、ハインドマン氏とも、マスロフとも戦ひ、國際的日和見主義全體と、その『最も勢力ある』中心たるドイツ社會民主黨とに對して、斷乎として宣戦するを憚らない。願者を社會主義的任務の實行者と説く企て(パリにおけるロシア人出征志願者團、即ち(ロシア)社會民主黨員、社會革命黨員、ポーランド社會民主黨員等の聲明を見よ)は、プレハノフの支持を得たゞけである。吾々の黨のバリ・セクションの多數はこの企てを承



認しなかつた。吾々の黨の見解が如何にして一定の形に表示されるようになったかといふことの歴史として、吾々は——誤解を避けるために——次ぎの事實を闡明しなければならぬ。即ちわが黨員の一團は、戦争によつて切斷された組織上の結合を再建するための大困難事を切り抜けた後、最初に『論策』<sup>テゼ</sup>を作成して九月六日—八日中に同志の間に回附した。ついでこの『論策』はスミス社會民主黨によつて、ルガノにおけるイタリア・スキス會議（九月二十七日）の二名の議員に交附された。そして十月中旬にいたつて初めて黨の結成を再建し、黨の中央委員會の立場をまとめ上げることに成功したのである。

\*一九〇五年革命の終了と共にロシアにおける革命黨の任務がひとまづ果されたものとして、黨を解體して教化團體と成すことを要求し、専ら合法主義によつて經濟的活動を行ふことを主張したロシア社會民主黨中の一派を指して云ふ。（譯者）

これがロシアおよび西ヨーロッパの社會民主黨における極く概略の事情である。インタナショナルの崩壊は手にとる如く明白である。フランス社會主義者とドイツ社會主義者との新聞論争は、究極のところまで言ひ切つてしまつた。左翼社會民主黨（メーリングおよび「ブレーメル・ビュル

ガー・ツァイツング」のみならず、穏和なスキスの新聞（『フォルクスレヒト』）も、インタナショナルの崩壊を認めてゐる。この崩壊を糊塗せんとするカウツキーの企ては卑怯な遁げ口上だ。そしてこの崩壊は、取りも直さず、ブルジョアジーの俘虜たることを立證せる日和見主義の崩壊に外ならぬ。

ブルジョアジーの立場は明白である。と同じく、日和見主義者がブルジョアジーの論議を盲目的に繰返してゐるにすぎぬことも明白である。こゝに『ノイエ・ツァイト』紙の怪しからぬ放言を指摘しておきたい。それによればインタナショナル主義とは、一國の労働者が……の名の下に他國の労働者に向つて××することにあるのだ！

の問題は——このことを日和見主義者に銘記して貰ひたい！——今度の戦争の具體的な歴史的性質を無視しては論じられ得ない。この戦争は帝國主義戦争である、即ち最も進歩した資本主義の時期、資本主義の戦争である。労働階級は最初にまづ國民の圏内において『處理』しなければならぬ、と『共產黨宣言』は言つてゐる。が、それは吾々が民族および祖國を承認する限界および條件を指摘した上で、即ちブルジョア的秩序、従つてまたブルジョア的祖國の必然的





戦争に關する或るドイツ人の聲

一九一四年十二月五日。『ソチアル・デモクラット』第三四號所載。



のは悪いことではないと語つてゐるのに、却つて優秀なる社會民主主義者は、カウツキーのよう  
に最も賤しむべき排外主義を『科學的』に是認し、さもなくばブレハノフのように、ブルジョアジ  
ーに對する××の宣傳を有害な『ユトピア』だと説いてゐるのだ。

そうだ、この種の『社會民主主義者』が多數を占めようと欲してをり、官認『インタナシヨナ  
ル』（國民的排外主義を國際的に是認するための同盟）を創立したがつてゐるとすれば、吾々はこ  
の際、汚され地に塗みれた『社會民主主義者』といふ名稱を抛つて、昔のマルクス主義的な『共  
産主義者』といふ名稱に歸つた方がよくはなからうか？ カウツキーは嘗つて、日和見主義ベル  
ンスタイン派が殆んどドイツの黨を公式に占領しそうになつたとき、そういつて嚇かしたことが  
ある。彼れ等の口では空つほな嚇かしたつたのが、別人の場合には遂に實行となるだらう。

## 死せる排外主義と生ける社會主義

(如何にしてインタナシヨナルを再建すべきか)

一九一四年十二月十二日。(『ソチアル・デモクラット』第三五號所載。)



れる。(第四四頁。) エンゲルスの有名な「フランス階級闘争」序文が現はれたとき、人々は(就中『フォルヴェルツ』紙で)これを日和見主義の意味に解しようとして企てた。だがエンゲルスはこれに憤激して、「何を措いても合法主義の平和的憧憬者」であるかの如く取られることに對して猛烈に抗議した。『吾々はすべての原因を認めなければならぬ、吾々は今や 制度物並びに  $\times\times\times$  のための闘争の時期に入つてゐるのであつて、この闘争は種々様々の盛衰浮沈の下に數十年を経過するかも知れぬ……が、すでに見通しのつく時日において、この闘争は西ヨーロッパにプロレタリアの とは行かずとも、プロレタリアに有利な重大なる勢力の變動を、多分間違ひなくもたらすものである。』(第六一頁。)  $\times\times$  的分子は増大しつゝある——一八九五年にはドイツの一千萬の選挙者のうち六百萬がプロレタリアで、三百五十萬が私有財産に關心を有する人間だつた。一九〇七年には後者の數は三萬人を増加したのに引きかへ前者は千六百萬人を増加した! 『だが進歩の速度は  $\times\times\times$  醗酵の時代がくれば一舉にして急激になる。』(第七〇頁。) 階級對抗は緩和されずに激成され、生活困難が増大し、帝國主義的競争が、帝國主義が、暴れ狂ふ。『 $\times\times$  の新紀元』が近づいてゐる。(以下原文四行省略。) 『世界戦争は今や極く間近かに押し迫つてゐる。だが過去

數十年の経験は、戦争は  $\times\times$  すること立證してゐる。』(第一〇五頁) まだ一八九一年にはエンゲルスは早や過ぎる  $\times\times$  を相俣して差支へなかつた、だがその年以來『局面は著しく變化してきた。』プロレタリアは『もはや早や過ぎる(傍點はカウツキーによる)  $\times\times$  を云々することを得ない。』(第一〇五頁。) 小ブルジョア團は極めて信賴するに足らず、ますますプロレタリアに敵對してゐる。だがこの危機の時代においては、彼れ等は『集團的に吾々の方に移つてくる』状態にある。肝心なことはたゞ社會民主黨が『確乎不動な、徹底的な、非妥協的な』態度を持することだけである、吾々は  $\times\times$  的時期に入つたことは疑ひを容れぬ。

カウツキーはずつと昔の、まる五年前にこう書いたのである。これがドイツ社會民主黨であつた。もつと正確にいへば、ドイツ社會民主黨はそうあることを約束した。こゝにいふ社會民主黨は尊敬して差支へなかつたし、また尊敬しなければならなかつた。

ところが、このカウツキーが今日書いてゐるところを讀め。以下は『戦争中における社會民主黨』といふ論文の最も重要な章句である(『ノイエツァイト』一九一四年十月二日、第一一七頁)。——『吾々の黨はこれまで、逼迫しつゝある戦争を防止する手段および方法については論議



してきたが、これに引きかへ戦争の力を防止することに成功しなかつた場合は、その戦争が行はれてゐる間吾々は如何に振舞ふべきかといふ問題は、多く討論したことがなかつた。……『戦争が勃發した場合ほど、政府の力が強く、黨の力が弱いときはない。』……『戦時そのものは、論争問題を平靜に、囚はれずに論議するには最も適しない時である。』……『實際問題はもはや、戦争か平和かではなく、勝利か、自國の敗北かである。』戦争に對する對抗運動のために交戦諸國の諸黨が協同することは？『實際にはそんなことはまだ試みられてゐない。その協同の可能性には吾々はつねに疑問をもつてきた。』……『獨佛社會主義者』間の反對は『原則上の見解』の中には存しない（兩者とも自國の祖國を擁護してゐる）……『そこから、すべての國民の社會民主黨にとつて、各自この祖國擁護に參與する同等の権利または同等の義務が生ずる、これに對してどの黨も他を非難するを得ない。』……『インタナショナルは崩壊した？』……『ドイツの黨機關紙は戦争中に黨の原則を最も力強く主張することを斷念した？』（『ノイエ・ツァイト』同號第九頁所載のメーリングの言葉）。間違つた見解だ……『こゝろいふ悲觀論にいたる何等の根據がない……何等原則上の意見の相違がない……原則上の一致が持續してゐる……戦時の法律に服従しなかつたら、その

結果は明白に『吾々の新聞紙の禁止』となる。だが法律に服従するといふことは、黨の原則の主張を抛棄することを意味しもしなければ、社會主義者鎮壓法といふダモクレスの劍（差し迫つた災害）の下に、吾々の黨機關紙のそゝいふような仕事を抛棄することをも意味しない（『カウツキー』、『インタナショナルと學國一致』、前掲第一八一—一九頁）。

こゝにこゝろいふ文章を殊更らに引用したわけは、こんな事が書かれ得るとは殆んど信じられなからである。こんな獨りよがりの馬鹿話、眞理に對するこんな不面目な……背離を文獻の中に見出すのは難かしい。一般に社會主義の明白な抛棄を糊塗するため、そしてヨーロッパの戦争を目當てにして、そゝいふ戦争の性質を考慮に入れて滿場一致で可決された精密な國際的決議（たとへばシュツトガルト、殊にバーゼルにおける）の抛棄を糊塗するための、こんな醜い逃げ口上は、赤裸々な背教者の『文獻』の中にも見出すのは難かしい！吾々がこのカウツキーの議論を『眞面目に取つて』これを『研究』しようと試みたとしたら、それは讀者に對して敬意を失することにならう。何故ならヨーロッパ戦争は、單なる『些細』なユダヤ人虐殺とは幾多の點で相違してゐるとしても、この戦争に参加するに好都合な『社會主義的』議論は、ユダヤ人虐殺に好都合な

『民主主義的』議論を、一から十まで思ひ出させるからである。

のための議論などは研究

なんかせずに、單にこれを礎づけにして、この議論の製造者を階級意識のある一切の労働者の眼前に曝し物にすべきである。

だが讀者は問ふだらう、第二インタナシヨナルの權威者が、即ち前述の見解を強く守つてゐた著者が、背教者よりも一層墮落するなどといふことが、どうしてあり得たのかと。吾々は答へていふ。それは別段何も珍らしいことはないといふ見地、『妥協したり忘却したり』するのは難かしいことではないといふ見地を——おそらく無意識に——取つてゐる人間にとつてのみ、こういふ不思議な現象が理解され得ると。だが社會主義的見解を眞面目に、實直に遵奉し、前掲の論文に書かれてある意見を主張してゐる人間は、『フォルヴェルツ』紙が『死んでしまつた』こと（マルトフがパリの『ゴロス』紙に言つてゐるように）、カウツキーが『死んだ』ことを別に驚かないであらう。個々の人物の没落は、大きな國際的變革の時期には何等不思議ではない。カウツキーはその偉大なる功蹟にも拘らず、大なる危機において即座にマルクス主義的な闘争的立場を取つた人々の中には斷じて屬してはゐなかつた（ミルラン主義の問題における彼れの意見の動搖を想起せよ）。

\*一八九三年フランス社會黨領袖ミルランはワルテック・ルソー首相より入閣の勧誘を受け内閣に列した。これを機因として、社會主義者はアルシヨア政府に参加すべきか否かの問題を中心として、ヨーロッパ社會主義者の間に論争が行はれ、一九〇四年のインタナシヨナル大會にもこの問題が上程された。（譯者）

そして吾々はいま、取りも直さずこういふ時期に遭遇してゐるのだ。『第一番目にまづ××せよ、ブルジョア諸君！』と、一八九一年にエンゲルスが書いた。謂はゆる平和的立憲的の時代にブルジョア合法主義の利用を固執してゐた（そして固執したのは徹頭徹尾正當であつたが）エンゲルスがそう書いたのだ。エンゲルスの思想は白日の如く明白である——即ち吾々階級意識のある労働者は、『第一番目』として××するだらう、今日吾等にとつては選舉から『××』（即ち××）に移るのに、ブルジョアジーによつてつくり出された合法の地盤がブルジョア自身によつて侵犯される瞬間を利用する方が一層有利だといふ意である。そしてカウツキーは一九〇九年に、今日ヨーロッパにおいては早や過ぎる××は起り得ない、また××を意味する、と主張したときは、すべての革命的社會民主主義者の侵すべからざる見解を表現してゐたのであつた。

とはいへ數十年の『平和的』時期は跡方もなしに過ぎ去つたわけではない。この數十年の歲月

はすべての國に必然的に日和見主義を生み出してきた、そして議會、組合、新聞、雜誌その他の『指導者』の間に、この日和見主義の勢力を植え付けてきた。ヨーロッパにおいて、革命的プロレタリアートを腐敗させ、力を弱めるために、ブルジョアジーによつて種々様々の方法で支持されてゐる日和見主義に對する、執拗な、不撓不屈の闘争が何等かの形で行はれなかつた國はない。この同じカウツキーが十五年前に、ベルンスタイン主義が始まつた時に次のように書いてゐる。——日和見主義が強まつて、只の聲から一定の傾向になるときは、分裂が當面の問題となるに相違ない。ロシアでは、労働階級の社會民主主義黨の創立者たる舊『イストラ』が、一九〇一年の第二號における『二十世紀の勞頭に』といふ論文において、二十世紀の革命的階級は（十八世紀の革命的階級、即ちブルジョアジーと同じく）自分自身の『ジロンド黨』と『山岳黨』とを有すると書いた。

\*フランス大革命における二つのアルジョア黨の名稱であつて、前者は妥協的であり、後者は急進的前衛を代表してゐた。（譯者）

ヨーロッパ戦争は最大の歴史的危機を意味し、新しい時期の開始を意味する。恐慌と同じく戦

争は、これまで底の方に隠蔽されてゐた對立を激成し、明示し、一切の欺瞞的外殻を粉碎し、一切の傳統を一掃し、腐朽せる諸々の權威を打破してきた。（ついでに、この點にすべてのの有益にして進歩的な作用がある。これが分らないのは、『平和的發展』の魯鈍な信奉者のみである。）成立以來二十五年——四十五年の間（一八七〇年から起算するか一八八九年から起算するかによつて）、社會主義を弘布し、社會主義の勢力を準備的に、初歩的に最も單純に組織するといふ、非常に重要にして有用な仕事を成就した第二インタナショナルは、今やその歴史的役割を果たして日和見主義のために敗かされて死んでしまつた。茲に死者をして死者を葬らしめよ。ひとりよがりの勿體振り屋（または排外主義者や日和見主義者の御用策士並びに従僕）をして、ゴーゴルの小説の中に出てくる二人の俗人を扱ふように、ヴァンデルヴェルドやザンパーをカウツキーやハーゼと和解させることに働かしめよ。ゴーゴルの小説中の一人は他を『鷲鳥』と罵りながら、その後で敵に友誼的に『接觸』することを求めたのだ。インタナショナルとは、人々が同一の卓を圍んで嘘つばちの三百代言式な決議文を書いたのを指して言ふのではない。これらの人間は、ドイツの社會主義者がフランスの労働者に××せよといふドイツのブルジョアの請求を是認し、フラ



中央委員會並びにペテルスブルグ労働者運動の指導的分子と連絡があり、彼れ等と思想を交換してをり、その間に連帯が本質的に存してゐることを確信してゐる吾々は、中央機關紙の編輯部として、吾々の黨の名において聲明することができる、こゝにいふ方向における仕事のみが社會民主主義的な仕事であり、黨の仕事であると。

ドイツ社會民主黨の分裂といふ考へは、多くの人をその『途方もなさ』によつて非常に驚愕させる考へのようにも見える。にも拘らず、こゝにいふ途方もないことが始まるか（しかもアドラーおよびカウツキーは、一九一四年七月の國際社會主義事務局の最後の會議において、そゝにいふ奇蹟は信じないと聲明してゐる！）、さもなくば吾々は、ドイツ社會民主黨の昔日の一切の光榮が崩れ落ちるのを目撃するだらう。客觀的状態はそのいづれかゞ起ることを立證してゐる。ドイツ社會民主黨（舊時の）を『信ずる』慣はしであつた吾々は、この論文を結ぶ前にもう一つ、永年の間幾多の問題において吾等の反對者であつた人々が、ひとりでにまたこゝにいふ分裂の思想をいなくよつになつたことを想起したいと思ふ。たとへばマルトフは『ゴロス』紙にこゝ書いた、『ファルウェルツ紙は死んだ』、『階級闘争の抛棄を』宣言した社會民主黨は、本統のことを公然と承認した方が、言

ひかへれば暫くその組織を解き、その機關紙を閉鎖した方がよかつたのだ』、『ゴロス』紙の傳ふるところによれば、ブレハノフは或る論文でこゝ言つた、『予は分裂の大反對者である。だが原則が組織の統一の犠牲にされてゐるときは、欺瞞的な統一よりも分裂の方がよい』と。ブレハノフはドイツ急進派のことを指してこゝ言つたのだ。彼れはドイツ急進派の眼の中の塵を見て、彼れ自身の眼の中の梁（つらみ）を見のがしてゐる。これは彼れの個人的な特性であつて、吾々は皆ブレハノフの理論においての急進主義と、實踐においての日和見主義との過去十年の日月を通じて、彼れの特性をあまりに見慣れてきた。だがこゝにいふ個人的な……特性をもつた人々が、ドイツ社會主義者の間の分裂を云々し始めたとすれば、それは時代の證である。

インターナショナル主義者の合同問題

一九一五年五月一日。(『ソチアル・デモクラット』第四一號所載。)







的政府がこの戦争をヨーロッパ戦争たらしめるならXXを以てこれに應ずるといふ、直接の威嚇を以て起つた。バーゼル大會は聲明して曰く、『各國政府は獨佛戦争がパリ・コンミューンの勃發を結果し、日露戦争がロシア帝國の諸民族のXX勢力を發動させたことを忘れない方がよい……プロレタリアは資本家の利潤のために、XXの名譽心のために、または秘密外交條約の榮譽を高めるために、XXXXXXXXXXXX罪惡と感ずる。』

そしてバーゼル決議の解説において、かのジョーレスが、『XXXXXXXXXXXX、XXXXXXXXXXXX、XXXXXXXXXXXXと聲明したばかりでなく、ヴィクトル・アドラーも嚴然として次ぎの如く聲明した『プロレタリアがXXのXXを握る時が近づいてゐる。プロレタリアは訴へ狀を以て起ち上るだらう、そして勞働階級がXを握つて、そのXの力によつて判決を行ふ時がくるだらう。』(『バーゼル・ファルヴェルツ』紙、第二七七號より引用。)

以上がこれまでインタナショナルが語つた言葉である。XXXXXXXXXXXXでXXXXXXXXXXXX。(以下原文十二行省略。)

そして今は、このインタナショナルがあらゆる國の排外社會主義者のために如何に凌辱されてゐることよ!

インタナショナルは、社會主義者はあらゆる防禦戦争において自己の『』をXXしなければならぬなどは、只の一度も主張しなかつたのだ。帝國主義戦争の時期においては、そんなことはそれこそ意味をなさぬ。カウツキーその人が次ぎのようなことを書いた時代があつた。

『他面において今日のような世界政策的形勢にあつては、プロレタリア的または民主主義的利益は防禦にあるか攻撃にあるかといふようなことが問題となり得るような戦争は全く考へられぬ。もちろん民主主義は民族の獨立を支持することを命じ、インタナショナル主義はあらゆる民族の獨立を支持することを命ずる。だが今日戦争の際に考慮の中に入つてくる大民族の獨立などは、決して脅やかされるものではない。今日唯一の戦争の危険は、プロレタリアが豫め根本的に否定的に對抗しなければならぬところの、海外世界政策の方から現れるのである。……こゝういふ形勢の下にあつては、肝心なことは、政府がその世界政策のために外敵から攻撃される場合にはプロレタリアの奮激を豫期し得ることを、政府に確信させることではなく、始まる怖れのある一

切の戦争に對して××××××××といふ烙印を捺すことである。』(『ノイエ・ツァイト』、一九〇六―七年度、第五十二號、第八五五―六頁。)

一九〇七年にはまだカウツキーは、ジューデクムおよびハーゼ諸氏の『博學なる通辯』並びに公認「理論家」の役目をつとめるまでに墮落してゐなかつたのだ。その當時はカウツキーは、目前にある戦争は帝國主義的なものであり得るだけだといふことが分つてゐたし、またその當時は、ドイツの祖國は民族的獨立を失ふ危険には決して脅やかされてゐないこと、民族的獨立の原則の擁護は、社會民主主義黨とプロシヤのエンケル團とが正式結婚を取り行ふことを決して意味するものではないことを知つてゐたのである。

今日の全時期の特徴であるところの帝國主義戦争においては、攻撃する側が明日は攻撃される側になり得るし、その逆はまた逆になり得るものである。たゞこの理由からだけでもインタナショナルは、防禦戦並びに被攻撃國をつねに如何なる場合も支持せよといふような標語を提出するわけには行かぬ。社會主義の個々の指導者の個人個人の間違つた説明と、インタナショナルの見解とを混同してはならぬ。インタナショナルは民族自決を繰返し繰返し支持してゐる。これはその通り

である。すでにコペンハーゲン(一九一〇年)においてインタナショナルは、『諸民族の自決權』を擁護することをすゝめてゐる。そいふ聲明は舊インタナショナルも發したのであつた。だがこれは一九一四年の戦争のように、典型的に帝國主義的な戦争に關係があり得るだらうか？

一般に攻撃戦と防禦戦との區別は大多數の場合極はめて疑はしいものである、と一九〇五年にカウツキーその人が書いてゐる。そして一九〇七年にはこの同じカウツキーが、社會民主黨エッセン大會でベーベルを反駁してこう言つた『實際においては戦争の場合に吾々にとつて肝要なことは、國民的問題ではなく國際的問題なのだ。何故なら強大國家間の戦争は世界戦争となり、ヨーロッパ全體を巻き込むものであつて、二國だけに關するものではないからである。だが一日ドイツ政府は攻撃を受けたのだといつて、ドイツのプロレタリアを欺くことができようし、フランスの政府は同じことを言つてフランスのプロレタリアを胡魔化することができよう、そうすればドイツとフランスのプロレタリアが同じ感激を以てそれぞれ自分の××に従つて、互ひに××し合ひ、××××××戦争とならう。』(エッセン黨大會議事録)

否、防禦戦、即ち「××××××」といふ基準は、社會主義者にとつては用ふべからざるものである。

吾々はあらゆる戦争に反対なのではない。現に一八四六年にはマルクスおよびエンゲルスはロシアに對するドイツの攻撃戦を宣傳した。『新ライン新聞』は次ぎの如く書いてゐる——

『ロシアとの戦争のみが革命的ドイツの戦争であり、それはドイツが過去の罪惡を洗ひ落すところの戦争、元氣を取り戻すところの戦争、そしてドイツ自身の専制者に打ち勝ち得るところの戦争である。』(遺稿集、シュツットガルト、一九二〇年刊、第三卷、第一一四頁。)

だがこれはジューデクムおよびハーゼ一派が現在行つてゐるものとは、如何にかけ離れたものであることよ！ 彼れ等は實際において彼れ等『自身の専制者』を扶けて、ドイツのプロレタリアの頸に蛇を益々固く巻きつかせるために力を借してゐるのだ！

インタナショナルは、ドイツ、オーストリア、フランス、ベルギーにおける排外社會主義者が今日やつてきたようなものを、斷じて是認したことも、宣傳したこともなかつた。インタナショナルの決議文を單に拔萃したゞけでも、これらの決議を蹂躪して、インタナショナルそのものを崩壊させてしまつた日和見主義者に對する最良の抗議狀たるはたらしきを爲し得よう。日和見主義はインタナショナルの中で非常に有力であつた。しかしながら今日ハーゼとヴァイヤン、エルヴェとジュー

デクムが互ひにそれを競つてゐるところの『愛國主義』が、インタナショナルの名において公然と勝利を得たにくらべれば、そんなに有力ではなかつた。だが日和見主義と排外主義とがヨーロッパの最も重要な諸黨において勝利を得たときは、第二インタナショナルは存在を止めたときである。新しいインタナショナルがその後を承けるだらう。

大ロシア人の民族的誇について

一九一四年十二月十二日。(『ソチアル・デモクラット』第三五號所載。)

民族および祖國について、如何に多く話され、述べられ、書かれてゐることよ！イギリスの自由主義的および急進的大臣、フランスの無数の『進歩的』政論家（これは反動派の政論家と完全に連絡してゐることを示してゐる）、ロシアの無数の官僚的、カデットの、進歩的寫字生——すべてが千種萬様の方法によつて、各自の『祖國』の自由と獨立を、民族獨立の崇高なる原則を、頌讚してゐる。その點では絞首人ニコライ・ロマノフの、または黒人および印度人の絞首者の、御用讚美者と、暗愚または無性格のために『風潮に従つて』泳いでゐる市井の小市民との間に、何のけじめもつかぬ。そしてまたその間にけじめをつける價值もない。吾々の目前にあるものは、大強國の地主および資本家諸氏の利害關係と、その源において緊密に結びついてゐるところの、非常に廣く深い精神的潮流である。これらの地主および資本家階級にとつて都合のよい觀念の宣傳のために、年々數百萬といふ金が支出されてゐる。斷乎たる排外主義者メンシコフから、日和見主義または無性格からなつた排外主義者の、ブレハノフやマスロフやルバノウイチやスミルノフ、クラボトキンやブルツェフにいたるまで、あらゆる方面から水を受けてゐるところの一個の巨大な水車である。吾々、大ロシア人社會民主主義者も、茲にこゝにいふ精神的潮流に對する吾々の態度を確定した

いと思ふ。ヨーロッパ東部並びにアジアの大きな部分における統治的民族の代表者たる吾々は、民族問題の大きな意義を忘れるのは相應はしくない——特に『諸民族の牢獄』と命名されるに値ひする一國において、そして特に資本主義がヨーロッパの極東およびアジアにおいて幾多の『新しい』大小の諸民族を活動および自覺にまで目覺めしめてきた時代に當つて、しかもツァール王權が、團結せる貴族やグチコフ、クレストフニコフ、ドルゴルコフ、クットラー、ロヂチュフの利益に添ふように幾多の民族問題を『解決』するために、幾百萬の大ロシア民族および『異民族』を武器の下に抑へつけてきた時機に當つては、民族問題の大きな意義を尙更ら忘れることはできぬ。それなら吾々大ロシアの階級意識あるプロレタリアにとつて、民族的誇の感情は縁のないものだらうか？ 決してさうではない！ 吾々は吾々の言葉と吾々の故國とを愛する、吾々は故國の勤勞大衆（即ち故國の人口の九割）を、階級意識ある社會主義者の階級意識ある存在にまで高め、することに、最も多く働いてゐる。ツァール主義絞首人や地主や資本家が吾々の故國を如何なる暴行と壓迫の下に置いてゐるかを見、且つ感じるのは、吾々にとつて最も心が痛むことである。吾々はこの暴壓が吾々の間に、大ロシア人の間に反抗を生み出したこと、こゝにいふ環境がラヂステ









# 今や如何

(日和見主義および排外社會主義に對する労働者の任務について)

一九一四年十一月十二日。『ソチアル・デモクラット』第三六號所載。

世界戦争によつて惹起されたヨーロッパ社会主義の最高の危機は、最初に(過去の幾多の大きな危機の場合にも認められたように)茫然自失の状態を結果し、その次ぎには社会主義内の種々の潮流、類別、見解の代表者の間に幾多の新たな分布替えをきたらし、そして最後にこの危機は、社会主義政策の原則における如何なる變化がこの危機から生ずるだらうか、そして如何なるものが社会主義政策によつて必要とされてゐるかといふ問題を、特に鮮明に且つ執拗に提起した。この三つの『段階』は一九一四年八月から十二月までに、ロシアの社会主義者が特に明瞭に通過してきたところである。茫然自失の状態は最初には可なり大きなものであつた、そしてこの状態はツァーリズムの迫害や、『ヨーロッパ人』の逮捕や、戦争の擾亂によつてなほ倍加したことは、吾々のすべて知つてゐる通りである。九月および十月の二箇月は、比較的多くの亡命者が居て、ロシアとの連絡が比較的多く、且つ比較的多くの自由が得られたパリおよびスエズにおいて、討論や講演や新聞紙上に、戦争を原因として生じた諸問題の新たな区分が特に廣く且つ十分に現れた時期であつた。ロシアの社会主義(並びに似而非社会主義)内の一つの潮流(並びに分派中)に、種々の色彩が現れて、評價されなかつたものは唯の一つもなかつたと断言することができる。系統的な、

實際的な仕事、宣傳、煽動、組織の基礎たり得るところの、精密な積極的な論議の時が来たことを、すべての人が感じてゐる——形勢が明確になり、すべてが明白になつた。そこで最後に吾々も誰れが誰れと一緒であり、誰れが何處に向つて行くかといふことを議論してゐるのである。

十一月二十三日——この日の翌日、ペテルスブルグにおいてロシア社会民主労働者黨の逮捕に關する官憲の報告が公表された——この十一月二十三日に、ストックホルムにおけるスウェーデン社会民主黨大會において、吾々によつて注意されてゐる諸問題が、究極的に且つ不可抗的に上程される場合が生じた。讀者はやがてこの事件の記述を見出すだらう、即ちそれはスウェーデン社会民主黨の公式報告書から、ビレーニン(中央委員會代表者)とラーリン(組織委員會代表者\*)の演説、並びにブランチングの提出した諸問題に關する討議を全譯したものである。

\*この組織委員會とは、メンセヴィキ派の『ロシア社会民主黨大會の組織(招集の意)のための委員會』を指すものであつて、この委員會は頭文字を取つて『オー・カー』と略稱される。(譯者)

戦争の勃發後初めて、吾々の黨、黨の中央委員會の代表者と、解黨派組織委員會(オー・カー)の代表者とが、中立國の社会主義大會において落合つたわけである。この兩派の代表は何處が相違





ウツキー等の排外社會主義者は、ブルジョア愛國主義擁護のための彼れ等の無性格な、露骨な説法が、日和見主義者の全社會層並びに無数のブルジョア新聞、ブルジョア政治家に取り容れられなかつたとしたなら、何等の重要さも有しなかつたであらう。

第二インタナシヨナル時代の社會主義黨の型は、黨内に日和見主義を許容してゐて、この日和見主義は『平和期』の數十年を通じて益々信奉者を増したが、潜伏してゐて、革命的労働者に迎合し、彼れ等からマルクス主義的用語を着服して、明白な原則的な限界をそこから取り去つてしまつた——そういう黨であつた。今やこゝにいふ型は命數が盡きてしまつた。假りに戦争が一九一五年に終るとしたら——日和見主義者は何等かの危機が現はれ次第に、一人残らず（無思慮無性格の人士と共に）ブルジョア側の味方に附いて、階級憎惡並びに階級闘争に關する論議を差しとめる口實を立ちどころに見出すであらう——常識のある社會主義者はそういうことを經驗に基いて知つてゐながら、（戦争が假りに一九一五年に終るさしたら）一九一六年に再びそういう日和見主義者と一諸に労働者黨を樹立し始めるだらうか？

イタリアでは黨は第二インタナシヨナル時代にとつての除外例だつた、——ピソラーチを先頭に

戴く日和見主義者は黨から遠ざけられてゐた。危機中におけるその結果は際立つたものであつた。種々の傾向の人間が労働者を偽はるやうなことがなく、『協同一致』についての立派な説法で以て労働者の眼を撫でるやうなこともなく、彼れ等は各自自分の道を辿つた。日和見主義者（そして労働者黨からの脱退者、たとへばムソリーニの如き）は排外社會主義の中を泳ぎ廻り、『英雄的ベルギー』に對して頌歌を唱ひ（ブレハノフのように）、それによつて英雄的でなくブルジョア的なイタリア——ウクライナやガリシア……（アルバニア、チュニス等言ふまでもなく）を強奪したがつてゐるイタリア——の政策を擁護した。そして社會主義はこの政策に反對して戦争に對する戦争を宣言し、×××準備を宣言した。吾々はイタリア社會黨を何等理想化するものではなく、イタリアの參戦の場合にもこの黨が全然一貫せる態度を取ることと保證するものではない。この黨の未來を言つてゐるのでなく、現在のことだけを言つてゐるのだ。吾々はヨーロッパの大多數の國の労働者が、日和見主義者と革命主義者との擬制的協同一致のために欺かれたといふ事實、そしてイタリアは一の仕合せな除外例であつて、現在の時機において何等そういう欺瞞が行はれてゐない國であるといふ事實を述べてゐるだけである。第二インタナシヨナルにとつては一の仕合せな除

外例だつたものが、第三インタナシヨナルにとつては常則とならなければならぬ、そしてさうなるであらう。プロレタリアートはつねに——資本主義が存立してゐる限り——小ブルジョアと隣り合せになつてゐるだらう。場合によつては小ブルジョアの一時的提携を抛棄するのは策を得たものではない。だが小ブルジョアの協同一致、日和見主義との協同一致は、プロレタリアートの敵か、さもなくば頑迷なる舊套墨守者によつてのみ、都合のよい時に擁護され得るものである。

今や社會主義××のためのプロレタリアートの闘争の協同一致は、一九一四年以後は、労働者黨が日和見主義者の黨と無條件に分離することを要求してゐる。吾々が何を指して日和見主義者と言ふかは——わが中央委員會の宣言の中に明白に記されてゐる。

そして吾々はロシアにおいては如何なることを目撃してゐるか？ 何等かの方法において、多かれ少かれ徹底的に排外主義——ブリシケウイチ流の排外主義たると、カデット黨流の排外主義たるとを問はず——と戦つてゐる人々と、マスロフ、ブレハノフ、スミルノフのようにこの排外主義に同意してゐる人々との協同一致、戦争に反対して働いてゐる人々と、有力な「記録」の著者連のように、戦争に反対しては働かないといふ聲明を發した人々との協同一致は、わが國の勞

働者運動にとつて有益か、有害か？ 兩眼を塞がうと欲してゐる人間だけが、この問ひに答へることを躊躇することが出来る。

こう言へばおそらく次ぎのように吾々を反駁する人があるだらう、「ゴロス」紙でマルトフはブレハノフと争つたではないか、そして幾多の友人並びに組織委員會の所屬者と共に、排外社會主義と戦つたではないかと。吾々はそれを否認はしない、そして中央機關紙第三十三號で吾々は直ちにマルトフを慶賀した。たゞ吾々はマルトフが「方向轉換」をしなかつたなら非常に満足だつたのだ（覺書、「マルトフの傾向轉換」を見よ）、吾々は組織委員會の傾向が斷乎たる反排外主義の傾向を形成することを非常に希望したのだ。だが吾々の希望にしる、何人の希望にしる、そんなものは眼目ではない。客觀的事實は何であるか？ 第一に、組織委員會の公式代表者たるラーリンは、『ゴロス』のことについて全然緘黙し、排外社會主義者ブレハノフのことを言つたり、「ベルナー・ターグワハト」に一論文を書いたことのあるアクセルロッドのことを言つたりして、決定的な言葉は只の一つも吐かなかつた。そしてラーリンは、彼れの公式の位地を外にしても、ロシアにおける解黨派の勢力的中心に地理的に接近してゐるばかりではないのだ。第二に、ヨーロッパの

新聞を取つて見よう。フランスでもドイツでも、新聞は『ゴロス』については緘黙してゐながら、ルバノウィッチやブレハノフやチハイゼのことを述べてゐる。(『ハンブルガー・エヒョー』——ド  
ツにおける排外主義的『社會民主主義』新聞中の最も排外主義的な機關紙——は、十二月十二日  
號でチハイゼをマスロフおよびブレハノフの追従者と呼んでゐる、これはロシアにおける二三の  
新聞もすでに指摘してゐるところである。明瞭な目標を意識してゐる一切のジャーデタムの友人等  
が、ブレハノフがジャーデタムに示してゐるところの思想的支持を充分に尊重することを心得てゐ  
るのは自明のことである。ロシアでは數百萬部のブルジョア新聞が『民衆』にマスロフブレハノ  
フ・スミルノフに關する報導をもたらして、『ゴロス』の傾向については一言も洩らしてゐない。  
第三に、一九二一—一九二四年の合法的労働者新聞の經驗は、解黨派的潮流の周知の社會的勢力  
および影響の源泉は、労働階級の中にあるのでなく、合法的著述家の基柱を生み出したところの  
ブルジョア民主主義インテリゲンチヤの層の中に存在してゐる事實を、充分に立證してきた。この  
層の國民的排外主義的潮流がさういふものであることは、ロシアの全新聞がベテルスブルグ労働  
者の書簡と一致して證明してゐるところである。この層の内部に個人々々の間に大きな分布替え

が生ずるのは極めて可能なことには違ひないが、彼れ等が一個の層として、『愛國的』でなく日和  
見主義的でなくなるのは全然あり得ないことだ。

これが客觀的事實である。吾々がさういふ事實を考慮に入れ、労働者に對して勢力を獲んと欲  
してゐる一切のブルジョア的新聞にとつては、外見的な左翼を有してゐることは(殊にこの左翼が  
官認のものである場合は)極めて好都合なことであるといふことを思ひ浮べるなら、組織委員會  
との協同一致の觀念は、労働者の任務を害ふ幻想と見做さなければならぬ。

組織委員會の政策は、十一月二十三日にはるくスウェーデンにおいてブレハノフとの協同一  
致に關する聲明を行ひ、一切の排外社會主義的心情を悦ばせるような演説を行ひながら、一方パ  
リヤスキスにおいては、九月十三日『ゴロス』發刊の日)から十一月二十三日にいたるまでも、ま  
た十一月二十三日から今日(十二月二十三日)にいたるまでも、ウンともスンとも言つてゐない  
——こゝにいふことはそれだけです。に劣等な政治的論策たるに相應はしい。そしてチュリヒにお  
ける『ナハクレンゲ』紙の公式の黨派的性質に對する吾々の囑望は、この新聞はさういふ性質を  
有しないだらうといふ、『ベルナー・ターグワハト』(十二月十二日)紙上の聲明によつて無に歸し

てしまつた……(因みに、『ゴロス』第五十二號の社説は、解黨派との分離の持続は、最悪の『國民主義』だと説いてゐる。この文句を文法上の意味から離れて解釋すれば、『ゴロス』編輯部は排外社會主義者と相容れない人士と接近するよりも、排外社會主義者との協同一致の方を擇んでゐるといふ、政治的意味が出て来るばかりである。『ゴロス』編輯部は悪い擇び方をしたものだ)。

この概観を完全なものにするためには、最後にパリにおける社會革命黨側の『ミスル』紙について一言する必要がある。この新聞も矢張り、『協同一致』を歌ひ、自黨の指導者ルバノウィッチの排外社會主義を辯護し、ベルギー・フランスの日和見主義者や大臣主義者を擁護し、ロシアのトルードキキ\*のうちの最左翼の一人たるケレンスキーの演説の愛國主義的動機については緘黙し、ナロードニキおよび日和見主義者の精神を以てするマルクス主義の修正に關する、御話にならぬほどの馬鹿げた小ブルジョア的な荒唐無稽なことを發表してゐる。一九一三年夏のロシア社會民主労働者黨の大會で、社會民主黨について言はれたことは、『ミスル』紙の態度によつて完全に且●二重に確證されるわけである。

\*トルードキキ(労働黨)は農民および小ブルジョアの利益を代表し、思想的には社會革命黨員であり、社

會改良主義者であつた。(譯者)

ロシアの社會主義者の中には、インタナショナル主義とは、ブレハノフとジュエデクム、カウツキとエルヴニ、ゲードとハインドマン、ヴァンデルヴェルドとピソラーチ等々が用意しつゝあるところの、すべての國の國民社會主義の國際的承認の決議文を、兩手をひろげて受け容れようと身構へすることの謂ひである、といふ風に信じてゐる人が仲々あるらしい。吾々の意見を述べるなら、インタナショナル主義とは自黨において明確にインタナショナル主義的政策を持つることに外ならぬ。日和見主義者や排外社會主義者と一緒では、實際においてプロレタリアートの國際的政策を決して行ふことができず、戦争に對する對抗運動を説くこともできなければ、そのために勢力を糾合することもできぬ。こういう苦がい、しかし避くべからざる事實について口を噤いだり、素通りしたりするのは、労働者運動にとつて有害であり且つ危険である。



ロシアのジューデクム派

一九一五年二月一日。『ソチアル・デモクラット』第三七號所載。

『ジューデクム』といふ言葉は一普通名詞の特殊の意義を有し、ひとりよがりの、良心のない日和見主義者および排外社會主義者の型を指すものである。全世界がジューデクム派のことを輕蔑を以て話すのは好い徴候である。だがこの場合に自分自身が排外主義に陥らないための手段が只一つある。この手段は——でき得る限りロシアのジューデクム等の正體を曝露するために協力することである。

結局においてブレハノフは小冊子『戦争について』を以て、この一派の先頭に立つてきた。彼れの考察は手もなく辯證法の代りに詭辯法をもつてきたのだ。フランスおよびロシアの日和見主義を掩ひ隠すために、ドイツの日和見主義が詭辯的に罪を着せられてゐる。その結果として生ずるものは、國際的日和見主義に對する鬭争ではなく、その支持である。一方ガリシアの運命については緘黙しながら、ベルギーの運命を詭辯的に歎いてゐる。帝國主義の時期（即ちマルクス主義者の一般的承認に従へば、資本主義の壞滅の客觀的條件がすでに成熟してをり、社會主義的プロレタリア大衆がすでに存在してゐる時期）が、ブルジョア民主主義的國民運動の時期と詭辯的に混同されてゐる。プロレタリアートの國際的××によるブルジョアの祖國の××がすでに成熟し

てゐる時期が——ブルジョアの祖國の發生および結合の時期と混同されてゐるのだ。ドイツのブルジョアに對しては詭辯的に平和破壞の罪を着せながら、一方『三國協商』<sup>トリアンタント</sup>のブルジョア側の長期に亘る不斷の戦争準備については口を噤んでゐる。またバーゼル決議に觸れることを詭辯的に避けてゐる。社會民主主義を詭辯的に國民的自由主義に置きかへ、ツァーリズムの勝利に對する希望に、ロシアの經濟的發展といふ口實を與へ、この場合ロシア諸民族の問題については一言も論じてゐるなければ、ツァーリズムによつてこの諸民族の經濟的發展が阻止されてゐることや、ドイツにおいて生産力が測るべからざるほど急激に増大したことなどについても一言も述べてゐない。こゝにいふブレハノフの詭辯を一々論議することになれば、一系列の論文を必要とするだらうが、彼れのこゝにいふ笑ふべき馬鹿話を論議することが、引き合ふ仕事かどうかは疑問である。たゞ一つの明白な證據だけを述べて置かう。エンゲルスは一八七〇年にマルクスに向つて、ウイヘルム・リーブクネヒトは反ビスマルク主義を彼れの唯一の指導原理としてゐるが間違つゝると書いた。ブレハノフはこの文句を見出したときに非常に悦んで言つた、吾々の場合は反ツァール主義が丁度これと同じだと！ だが君は詭辯法（即ち生じたものと關聯させずに偶然事の外面

的關聯を持ち出してくることに代ふるに、辯證法(即ち出來事とその發展との全具體的狀態の研究)を以て吟味せよ。ドイツを統一することが必要だつたのだ、そしてマルクスは一八四八年の前にも後にも、一貫してそれを認めてゐた。エンゲルスは一八五九年にもなほドイツの民衆に對して、統一のための戦争を行ふことを要求してゐた。この統一は革命的な方法で達成されなかつたので、ビスマルクが反革命的、ユンケル的な方法でこれを成就したのだ。統一の完成が事實となつたときは、即ち唯一の原則としての反ビスマルク主義は下らないものとなつたのである。

そしてロシアでは？ わが勇敢なるブレハノフは、ロシアの發達のためにはガリシア、コンスタンチノープル、アルメニア、ペルシア等を無條件的に占領しなければならぬと、公言する勇氣をもつてゐただらうか？ 今日そう言ひ切る勇氣をもつてゐただらうか？ ドイツはドイツ民族の分散状態(フランスおよびロシアのために十九世紀の三分の二の間壓服されてゐた)から統一に移らなければならなかつたのだが、これに反してロシアでは大ロシア民族は幾多の他民族を統一するよりもむしろ壓服してゐたといふ事實を、一體ブレハノフは考へたことがあるだらうか？ブレハノフはそういうことを考へることなく、エンゲルスが一八九一年に、ドイツはフランスお

よびロシアの同盟軍と生死を堵して戦ふ必要があるといつた文句を引張り出してきて、ジューデクムがその意味を歪めてゐると丁度同じように、自分の排外主義を隠蔽するために、エンゲルスの一八七〇年の文句を引張り出して歪めてゐるのだ。

別な言葉でいへば、別な事情の場合にも「ナーション・サーリヤ」紙は第七、八、九號で排外主義を擁護してゐる。チェレワニン氏は、「ヨーロッパ」が(!!)ドイツに對して奮起したのだといふ確信の下に、『ドイツの敗北』を豫言し、希望してゐる。アー・ペー君は「如何なる犯罪よりも悪い」「失策』の故にドイツ社會民主黨を痛罵し、ドイツ軍國主義は「一切の尺度を超へた、特殊の罪惡」を有してゐること、或るロシア人仲間の汎斯拉ヴ主義の夢想は「ヨーロッパの平和の脅威ではなかつた」ことを確言してゐる。

合法的機關紙に、ドイツの「限界を絶した」罪や、ドイツの敗北の必要を書き立てゝゐるのは、排外社會主義者やブリシケウィッチに同意することを意味しないだらうか？ ロシアの軍國主義がその百倍も限界を絶した罪を有してゐることは、ツァール主義檢閲官の壓迫の下に箝口されてゐる。排外主義者たることを欲しない人間なら、そういう事情の場合に、少くともドイツの敗北や

その絶大なる罪を云々することが出来る筈のものだらうか？

『ナーシャ・サーリヤ』は『戦争に對する無抵抗』の道を通つたばかりでなく、大ロシア的、ツァール主義的、プリシケウイチ主義的排外主義の水車に水を注ぎ込み、『社會民主主義的論調で以てドイツの敗北を説き、汎スラヴ主義者を清淨らしく見せてゐる。そして一九一二年から一九一四年にかけて労働者の間に解黨主義的大衆宣傳を行つたのは、取りも直さずこの『ナーシャ・サーリヤ』の記者であつて、それ以外の誰れでもなかつた。

最後にアクセルロッドのことを言はう。彼れも『ナーシャ・サーリヤ』と記者の同じく、忌はしく且つ不仕合せにもマルトフによつて掩護され、洗ひ淨められてゐる。

アクセルロッドの意見はマルトフの同意を以て『ゴロス』第八六―八七號に掲げられてゐる。それは……排外社會主義的意見である。フランスおよびベルギー社會主義者のブルジョア内閣への加害を、アクセルロッドは次ぎの如き議論で以て擁護してゐる。

一、『今日何かといへば引張り出されるのを常とする歴史的必然なるものは、マルクスにとつては、社會主義的變革を期待して具體的な害惡に對して受動的態度を取ることを決して意味しな

かつた。』これはまた何といふ混亂だ。何のためにそんなことを言つてゐるのだ。歴史の中に起きる一切のものは必然に起きるのだ。これは分り切つた真理である。排外社會主義の反對者は、歴史的必然を論じてゐるのではなく、戦争の帝國主義的性質を論じてゐるのだ。アクセルロッドはそれを理解しないものゝ如く、右から生ずるところの、『具體的害惡』の評價を會得しないものゝ如くである。即ち彼れはあらゆる國におけるブルジョア支配と、『社會的變革に』導くところの革命的行動の誘導に適する瞬間とを、評價することを知らないものゝように語つてゐる。『受動的』なのは、そうではないと言つてゐる排外社會主義者自身である。

二、曰く、何人が眞の戦争開始者であつたかといふ問題を無視してはならぬ、何故なら人々は『それによつて戦争の襲撃の下に曝らされ、自己の獨立を擁護する必要に當面させられる』から、そしてこの同じ頁に次ぎの告白を見る、『フランスの帝國主義者は慥かに二三年後に戦争を挑發しようとしてゐた！』だがその時代には——よくお聴きなさい——プロレタリアートが有力になつてゐるだらう、そこで——平和の機會もあらうと！

だがその時代には、アクセルロッドの心情にとつてかくも好ましい日和見主義が有力になつてゐ

るだらうし、社會主義に對するもつと卑しい裏切りが行はれる見込みがあることを吾々は知つてゐる。吾々は數十年の間三人の強盜（英、露、佛のブルジョアと政府）がドイツを掠奪するために戦備をととのへてきたことを知つてゐる。三人の強盜が注文の刀をまだ手に入れないうちに、二人の強盜が先んじて襲撃を行つたのが不思議だらうか？ すべての社會主義者がパーゼルにおいて、討論なしに「満場一致」で承認したところの、すべてのブルジョアの同等の「責任」を、「發頭人」といふ文句で以て糊塗するのは詭辯ではないといふのか？

三、「ベルギーの社會主義者を、自國を擁護してゐるといつて非難する」のは、「マルクス主義ではなく冷嘲主義<sup>チニスム</sup>」である。なるほどポーランドの叛亂（一八六三年）に對するブルードンの態度を、マルクスはそう呼んだ。しかしながらマルクスはツァーリズムに對するポーランドの叛亂の歴史の進歩性を、一八四八年以來絶へず語つてゐた。これは何人も争はうとはしなかつたことである。その場合の具體的條件は、東ヨーロッパにおける民族問題が解除され得なかつた點に存した。即ちツァーリズムに對する戦争がブルジョア民主主義的性質のものであつた點に存したのであつて、その帝國主義的性質に存するのではない。これは分り切つた真理である。

現在の戦争においてベルギーの「國」を助けるには——もし社會主義××に對して否定的な、或は冷嘲的な、或は冷淡な（アクセルロッドのように）態度を持するなら——ウクライナを絞め殺すためにツァーリズムを扶けるような具合にする外はあり得ない。これは一個の事實である。この事實をロシア社會主義が回避するのは、それこそ冷嘲主義である。ベルギーのことについてはガミク言つて、ガリシアのことについては黙りこくつてゐるのが冷嘲主義なのである。

しからばベルギーの社會主義者はどうすべきだつたか？（以下原文十一行省略。）辯證法やマルクス主義を喋々しながら、多數者に對する必要な（一時の間必要であるとすれば）服従と、××的工作とを結合することができぬのは、如何なる場合たるかを問はず労働者を輕蔑することであり、社會主義を愚弄することである。「ベルギーの市民諸君！ 吾々の國は一大不幸に遭遇してゐる。それは萬國のブルジョアによつて、同じくベルギーのブルジョアによつて惹起されたのだ。諸君はこのブルジョアの束縛を脱したくないか、諸君はドイツの社會主義者に訴へようとは思はないか？ 吾々は少數だ、私は諸君の意に従つて戦争に行きはするが、戦争中にも萬國のプロレタリアの××を××××するだらう、それがなければベルギーおよび他の諸國の勞

働者および農民のために救済の道は決してないからだ！』こういう演説をすればベルギーやフランスその他の代議員は、牢獄の中に入れられて、大臣の椅子には据ゑられないに違ひない、だがその人間は社会主義者であつて裏切り者ではないのだ。そうしたならばフランスの労働者兵卒も、今日塹壕の中で、その人間のことを彼れ等の指導者のように話し合ひ、労働者の任務の裏切り者のように話すことはなかつたに相違ない。

四、『祖國といふものが存立してゐる限りは、そしてプロレタリアの生活および運動が、これまでと同じ程度にこういふ祖國の圏内に押し込められてゐて、プロレタリアートがその祖國の外に何等特別の國際的土臺があることを感じない限りは、プロレタリアートにとつて愛國主義と自己防禦の問題が存在するだらう。』ブルジョア的プロレタリアートの國際的××によつて撤廢されるまでは存立するだらう。そのための土臺はすでに現存してゐるのだ——それはカウツキー自身も一九〇九年に認めてをり、またバーゼルにおいて滿場一致で承認された通りであつて(以下原文二行省略)『歴史的必然』を以てあらゆる××に付き物となつてゐる犠牲を怖れない人々に對して、現在すべての國の労働者が深甚なる同感を有してゐる事實によつて立證されてゐる通りであ

る。阿克セルロッドの言葉は××的活動の弛棄であり、排外主義ブルジョアジの議論、繰返しに外ならぬ。

五、阿克セルロッドは言ふ、ドイツ社会主義者の態度は決して裏切りではなかつた、『彼等がそういう態度を取つた原因』は、ドイツのプロレタリアートがそこに生活し働いてゐるところの、祖國といふ一區切りの土地と有機的に聯結してゐる濃澗たる感情であり意識であると。この阿克セルロッドの言葉も右と全然同一の意義をもつてゐる、實際はドイツ人の態度はゲード等の態度と同じく、疑ひもなく裏切りである。それを隠蔽し、擁護するのは品のよいことではない。實際は取りも直さずブルジョアの祖國こそ、ドイツの労働者とドイツの土地との間の生ける紐帯を破壊し、毀損し、切斷し、歪めて、奴隸と奴隸主との間の『紐帯』のみを生み出してゐるのだ。實際はブルジョアの祖國の××のみが、あらゆる國の労働者に『土地への從屬』と、母語の自由と、一片のパンと文化の祝福とをもたらすことができる。阿克セルロッドはブルジョアジの頌詞捧呈者にすぎぬ。

六、『ゲード等の如き試験済みのマルクス主義者』に對しては『日和見主義の罪を課するに慎重』

でなければならぬと労働者に向つて説教するのは、指導者に對する關係において奴隸的態度を取れと労働者に向つて説教するのと同じである。吾々は労働者に向つてこう言ふだらう——一九一四年における社會主義に對する公然たる裏切りの外に、ゲードならゲードの全生涯の實例について學べ。彼れの罪を薄める一身上その他の事情は或はあるかも知れぬ、だが眼目は人物の罪を云々することではなく、出來事の社會主義的意義を明らかにすることである。

七、例外的に重大な場合に××の綱領條項を持ち出すのは、不名譽な三百代言的穿鑿に類似するといふ理由で、入閣の『正式』認容を論じてゐる。しかしこの綱領條項の意義はプロレタリアートの國際的××の促進であつて、それに反對の作用をすることではない。

八、『國の有機的發展に觸れない程度のロシアの敗北は、舊制度の掃蕩を促進することを得よう』といふアクセルロッドの説明は、それ自身としては正しいが、この説明がドイツの排外主義者の是認と結びつけられてゐる場合は、ジューデクム派に取り入らんとする企てに外ならぬ。ロシアの敗北の利益を認めながら、それと同時に獨逸社會主義者に對して公然とその裏切りの罪を鳴らさないのは、實際上においては、獨逸社會民主主義者を扶けて、彼れ等が事件から手を引い

て労働者を欺くことを是認することを意味する。アクセルロッドの論文は二重の會釋である——ドイツの排外社會主義者に對する會釋と、フランスの排外主義者に對する會釋と。これを一緒にすればこの兩様の會釋は、『ロシア・ブンド主義的』排外社會主義の一例となる。

そこで讀者は、『ゴロス』編輯部がアクセルロッドの興奮的な論議を掲載しながら、『彼れの論策の多くと』一致するものでない旨を何等告げず、しかも次ぎの第九十六號の社説で『能動的な赤裸々な愛國主義の諸分子との徹底的分離』を説いてゐる態度を、合理的だと判断するかも知れぬ。實際『ゴロス』編輯部はそれほど素朴であり、乃至は眞理を見落すほどに不注意だらうか？ アクセルロッドの論議は徹頭徹尾、『能動的な(何故なら著述家の活動は書くことなのだから)愛國社會主義の要素』であることを知らぬのか？ そして『ナーシャ・サーリヤ』の論說家、チェレワニン、アー・ペー・ヴェー一派の諸氏——彼れ等は能動的な愛國社會主義の分子ではないか？

如何に警察および反動派がドイツ社  
會民主黨の統一を擁護してゐるか

一九一五年三月三日。(『ソチアル・デモクラット』第三九號所載。)



ゴータにおける社会民主主義新聞『ゴータ・フォルクスブラット』は、一月九日號に、「警察の保護下における社会民主主義議員團の政策」といふ標題で一論説を掲げてゐる。軍事行政といふ氣もちのよい後見人の下に置れた新聞は、こう記してゐる——

前檢閱の實施の最初の二日の經驗は、中央官憲が吾々の列伍内の社会民主主義議員團の政策に対する批評家の口を塞ぐように腐心してゐることを明白に示してゐる。檢閱官の努力は、社会民主党内の『黨内平和』、言ひかへればドイツ社会民主党の『統一』、『團結』並びに力を保護するに至つた。政府の庇護の下にある社会民主党——これがわが『大なる』時代の對内政策における最も重大な出來事である。

わが社会民主主義議員團に席を置く政治家が、自己の意見に賛成させるため、盛んな煽動を開始してからすでに數週間を経過してゐる。二三の特に大きな黨中心地では、彼れ等は力強い反對を受けてゐる。彼れ等の宣傳は労働者の間に、戦費協賛者を支持するどころか、反對の氣分を醸成してゐる。されば軍司令部は發賣禁止令を發布したり、集會自由を撤廢したりして、戦費協賛者に力を添えることに腐心してきた。ゴータでは社会民主主義議員團は或る種の集會禁止令の庇護を

得てゐる(ハンブルグでは軍事檢閱)……………

ベルンにおけるスキス社会民主主義新聞は右の言葉を引用して、ドイツにおけるすべての社会民主主義新聞は軍事檢閱の下に置かれてゐることを指摘して、次ぎの如く附言してゐる。「故に間もなくドイツ新聞の意見の一致を妨げるものは何もなくならんだらう。誰れでもこれを妨げようとなれば、軍事獨裁は黨内平和の遵奉者たる『社会民主主義者』側からの直接および間接の告發に基いて、そつといふ企てを鎮壓するだらう。」

急進的新聞は事實上、直接または間接に、日和見主義的社会民主主義新聞によつて告發されてゐる。

このように幾多の事實は、吾々が『ゾチアル・デモクラット』第三十六號に、「日和見主義者はブルレタリアXXのブルジョアの仇敵である……彼れ等は危機の時期に至れば、團結せるブルジョアジー全體の公然たる同盟者たる正體を一擧に曝け出すものである」と書いたのは、完全に正しかつたことを立證してゐる。今日においては協同とは、社会民主党の標語としては、日和見主義との協同、日和見主義者(またはブルジョアジーと日和見主義者との聯盟)への服従を意味する。この

標語は實際上は警察および反動派を授けるものであつて、労働者運動にとつて危険な標語である。因みに、茲で只今出版されたホルハルトの優秀なパンフレット、「一九一四年八月四日以前および以後」に論及したい、これはドイツ社会民主党が自己を裏切るに到つたか否かといふ問題を論じたものである。著者は答へて言ふ、然り、ドイツ社会民主党は自己を裏切つたと。そして著者は八月四日以前の黨の幾多の聲明と、八月四日の黨の政策との間に露骨な矛盾があることを指摘してゐる。ドイツ（並びにその他の諸國）の社会民主主義者は、一九一四年八月四日以前には、吾々は戦争に對抗する戦争において、如何なる犠牲の前にも逡巡することを欲しないと云つた。しかるに一九一四年九月二十八日には、黨幹部の一員たるオットー・パウエルは、合法的黨機關紙に於ける二千萬マルクの資本と一萬一千人の使用人のことを、どうだのこうだのと言つてゐる。合法主義のために腐敗して、數萬の指導者、職員、役員並びに持權的労働者は、社会民主主義プロレタリアの數百萬軍を解體させてしまつた。

そこから極めて明白に次ぎの教訓が生ずる、即ち排外主義および日和見主義と斷然訣別せよといふ教訓である。しかも厚顔無耻なる社会民主主義の饒舌漢（ガルドナン一味）は、厚顔無耻な

るパリの新聞『ミスル』において、小ブルジョア思想のためにマルクス主義を抛棄してゐる！

經濟學のイロハも忘却されてゐれば、資本主義の世界的發展は一個の革命的階級——プロレタリアート——のみを生み出すといふことも忘却されてゐる。チャーチズム、一八四八年七月、パリ・コミューン、一九〇五年十月および十二月——いふものはすべて忘却されてゐる。労働者は

××を遂行するには、幾多の敗北と失錯、不成功と衰弱とを経過しなければならぬ。が労働者はそれらのものに對抗して進んでゆく。プロレタリアに對するブルジョアおよび小ブルジョアの感化が、一九一四年のインタナショナルの汚辱と崩壊との根本的にして最も重大な原因であることは、盲目とならない以上は見逃すことはできぬ。ところが美辭麗句家のガルドナンとその一味とは、社会主義の治療を企て、その社會的歴史的基础たるプロレタリアートの階級闘争を完全に抛棄し、インテリゲンチヤ的ナロードニキといふ下司張つた水で以てマルクス主義を薄めようと欲してゐる。プロレタリア××運動を日和見主義から完全に絶縁させるための不撓不屈の活動ではなく、この運動を、ロープシンやチェルノフ型の日和見主義者——一昨日は××を手にする自由主義者だつたのが、昨日は只の自由主義者に鞍がへをし、今日は『労働』原則に關する甘いブル

ジ・アの空文句に耽つてゐる——と融合させようといふのだ!! ガルドナン派はジューデコム派より良くはなく、社會革命黨は解黨派より良くはない——この両者が、社會民主黨と社會革命黨とを合同させる筋書を専門に實行してきた雑誌『ソウレメンニク』で、かくも仲よく抱き合つてきたのは理由がなくはない。

## ロンドン會議について

一九一五年三月三日。(『ソチアル・デモクラット』第三九號所載。)

ロシア社會民主労働者派の代表者の書簡の抜萃を茲に掲げる。

『一九一五年二月十四日、ロンドン。昨晚インタナショナル英國部幹事の手から、僕の書簡に答へたロンドン會議の陳述書を受取つた。僕はこの書簡で會議に招待されることを別に請求することなく、陳述書を書いておいただけだ。僕は出席して聲明書を読みあげようと決心した。社會革命黨からのルバノウィチ、(排外社會主義者からの)チェルノフ、『ミスル』からのバプロフ、組織委員會からの「*エー*」などに出會つた。後者はマルトフと一諸に代議員として派遣されたのだが、マルトフは査證を得ることができなかつたので出席してゐない。イギリスから十一名の代議員(ケヤ・ハーディーを首席として、マクドナルドその他)、フランスから十六名(ザンバー、ヴァイヤン等)、ベルギーから六名(ヴァンデルヴェルド等)が出てゐる。

議長はこの會議の目的は意見の交換であつて、決議の採擇ではないといふ開會の辭を以て會議を開いた。フランス代議員の一人は、多數の見解を會議によつて纏めても差支へないといふ但書を提議した。沈黙のうちに可決された。

日程は、一、民族の權利——ベルギー、ポーランド、二、植民地、三、平和の保證、資格審査

委員が選出された(ルバノウィチその他)。各國の代表者が一名づつ、戰爭に對する態度について簡単な報告を述べることに決した。僕は發言して、吾々の黨の公式代表者が國際社會主義事務局に招待されなかつたことに對して抗議した。議長は僕の發言を遮つて、『名の知れ渡つてゐる』人は皆招待されたと主張した。僕は第二番目に、事實上の代表者に前以て通知されてゐないことに對して抗議した。その上に僕は、戰爭に對する吾々の態度を表明してゐる吾々の宣言に論及し、この宣言が國際社會主義事務局に送附されてゐることを指摘した。吾々は媾和條件について語る前に、如何なる手段を以てそれに努力するかを確立すべきであつた、そしてそのためには、一般的な××的社會民主主義的土臺が現存してゐるか否か、吾々は排外主義者、平和主義者として商議すべきか、それとも社會民主主義者として商議すべきかを確定する必要がある。僕は吾々の聲明書を読み上げた。ところが議長は僕をして読み終らせずに、僕が代議員として出席してゐるのかどうかは、まだ明白にされてゐない(！)こと、代議員は『各種の黨を批評するために』集つてゐるのではない(！)と説いた。僕は資格審査委員會の報告の後僕の演説を續行する旨を聲明した。

一般狀勢について、ヴァイヤン、ヴァンデルヴェルド、マクドナルド、ルバノウィチによつて簡

單な聲明が行はれた。それについて資格審査委員會の報告の後、ヒュー一人だけで組織委員會を代表し得るか否かを決定することの提議があり、また僕は會議に参加することを「許可」された。僕は會議に對してその「友誼」を感謝し、且つ僕がこの會議にとゞまることが出来るか否かを確定するために、聲明書の續きを讀みあげようと欲した。議長は僕の言を遮つて、會議に對して「條件」を課することを僕に許さなかつた。そこで僕は如何なる理由から會議に参加しないかを述べる許しを請うた。拒絶された。ロシア社會民主黨労働者派は會議に参加しないことを聲明することを許して貰ひたい。そういふ理由のために僕は議長に文書で以て説明書を交附した。そして書類を集めて退出した……。」

レットランド社會民主黨幹部首席(ビー)は、吾々の宣言に完全に與みするといふ聲明書を議長に交附した。

會議の代議員は如何なる談話をも新聞に發表することを禁ぜられた。だがこれは勿論同志マキシモウィッチの退去には係はりのないものであつて、ケヤ・ハーディーが參與してゐる機關紙『レーパー・リーダー』はマキシモウィッチの退去を報じ、彼れの立場を略記した。

ロシア代表は次ぎの如き光景を呈してゐる——中央委員會とレットランド社會民主黨とは明白に且つ斷平として排外社會主義に反對してゐる。解黨派は錯亂してゐる。社會革命黨のうちでは『黨』(ルバノウィッチ)は排外社會主義に賛成で、『ミスル』紙(バプロフおよびチュルノフ)は反對派の中に踏みとどまつてゐる。これに對しては、彼れ等が如何なることを聲明したかを吾々が知つたときに、始めて批評を加へることが出来るだらう。

ロシア社會民主労働者派に關する  
裁判は何を立證したか

一九一五年三月二十九日、『ソチアル・デモクラット』第四〇號所載。

一九一四年十一月四日、ペテルスブルグ近郊の會議の現場で逮捕された五名のロシア社會民主労働者派の所屬員と他の六名の社會民主主義者とに關する裁判は終結した。被告一同は追放を宣言された。合法新聞紙は訟訴記事を掲載した、だが検閱官は、愛國主義者とツァーリズムにとつて氣もちの良く無さ相な箇所を悉く抹殺した。『國內の敵』は手取り早く處分された、そして今や公生活の表面には再びもと通り、ブルジョア排外主義者の狂妄な咆哮と、一と塊りの排外社會主義者の共鳴とを、見たり聞いたりできるだけだ。

一體ロシア社會民主労働者派に關する裁判は、如何なることを立證したか？

第一に、革命的なロシア社會民主黨の前衛が、法廷の前で堅固なる精神を欠いてゐることを證據立てた。被告はロシアにおける中央委員會の成員が誰れであり、労働者團體に對する黨の代表者が誰れであるかを、國家權力が探り出すのを妨げようと欲した。この目的は達成された。この目的のためには今後とも××の前では、黨によつて以前から且つ公式に推奨されてゐる戦法、即ち×××××といふ戦法を用ふるべきであつた。しかるに同志ローゼンフェルドがしたように、愛國社會主義者ヨルダンスキー氏との連帶を陳述したり、中央委員會との意見の相違を述べたりす

るのは、不當な方法でもあれば、×××社會民主主義の立場から見て排斥すべき方法でもある。

『ディエン』紙の報道によれば——公式の且つ完全な裁判の報道は存在してゐない——同志ペトロフスキーはこう述べてゐる、『それと同時に(十一月)に、予は中央委員會の決議を入手した……そしてその外に戦争に對する労働者の態度を述べた労働者の幾多の決議をよこされた、これらの決議は中央委員會の態度と一致してゐた。』

この陳述はペトロフスキーにあらゆる名譽を與へるものである。排外主義は四方八方非常に優勢であつた。ペトロフスキーの日記の中に、急進的な氣もちであるチハイゼですら感激を以て『解放戦争』を語つてゐるといふ文句があるのは理由が無くはない。この排外主義に對してロシア社會民主労働者派の代議員等は、逮捕されない前には反對してゐたのだ。だが彼れ等は法廷の前でもこの排外主義から分離すべきであつた。

カデット黨(立憲民主黨)機關紙『リエッチ』は、ツァール法廷に對して、社會民主黨議員はツァールを希望してゐるといふ『口牌を破壊』したことを奴隸のように『感謝』してゐる。

カデット黨はロシアにおける社會民主黨員が手足を縛られてゐるのを利用して、被告は刑罰を怖

れて陳述したのではないといふようなことを確言して、黨と議員團との間の外見上の『抗爭』を重大に取りたがつてゐる。明らかに彼れ等は審問の最初の段階において、議員が軍法會議と死刑とを以て威嚇されたことを知つてゐないのだ。

同志等は違法的組織の問題について一切の××を拒み、この世界史的瞬間を捉へて××の××を利用して、一般にツァーリズムに對してのみならずあらゆる色彩の排外社會主義者に對しても對抗するところの社會民主黨の見解を、××の窓の外に弘布すべきであつた。

政府機關紙やブルジョア新聞がロシア社會民主労働者派に對して如何に狂暴に攻撃しようとも、社會革命黨や解黨派や排外社會主義者共が氣味良さに相に吾々の弱點や、外見上の『中央委員會との意見の相違』などを嘶し立てたつて構はぬ。(諸君は言ふまでもなく原則的に戦はなければならぬ!) ××プロレタリアートの黨は、公然と自己に對して批判を向け、失敗を失敗として、弱點を弱點として明らかに表示するに充分に有力である。ロシアの階級意識のある労働者は、世界戰爭中、並びに國際的日和見主義の國際的崩壊中において、國際的な××社會民主主義者としての義務をつくすべく堅固なる精神を最も多く發揮してきた黨をつくり、前衛を生んだ。吾々

が辿つてゐる道は、最大の危機によつて試練され、唯一の正しい道であることを——一步毎に——證據立てゝきた。されば吾々は一層斷乎として、一層堅固にこの道を進みたいと思ふ、そして新しい前衛隊を繰り出して、前衛隊が單にこゝいふ仕事を行ふだけでなく、その仕事を正しい方法で結末に導き得るまでにしたと思ふ。

第二に、この裁判は、議會主義が××社會民主主義によつて利用され得るものだといふ、これまで國際的社會主義において嘗て見なかつた光景を展開した。この議會主義の利用の手法は、如何なる演説よりもプロレタリア大衆の悟性と心情とに訴へるだらう、そして如何なる議論よりも確實に合法日和見主義者と無政府主義の空談者とを駁撃するだらう。

活動に關するムラノフの報告とベトロフスキーの略説とは、吾々がつねに××にしておかねばならなかつたところの、議員の仕事にとつて模範となるであらう。そしてこの仕事の意義は、ロシアの階級意識のある一切の労働者にとつて益々分かるようになるだらう。ヨーロッパの殆んどすべての『社會主義的』(この言葉を冒瀆したのを悪く取らないように望む!)議員が排外主義者の奴僕たる正體を現はし、わが自由主義者や解黨派をそゝのかしたところの不吉なる『ヨーロッパ主義』が、奴僕的合



法主義の馬鹿々々しい慣はしであることを證據立てたとき——この時に當つてロシアに一個の労働者黨が存在してゐて、その議員は能辯によつて輝やいてゐるのでなく、ブルジョア的な、教養のある交際場サロタンに關係あることによつて輝やいてゐるのでなく、『ヨーロッパ』な辯護士や議員の事務的才能によつて輝やいてゐるのでなく、労働大衆と結びつくことを以て、この大衆間における没我的な仕事を以て、  
宣傳者および組織者の謙讓な、目立たない、困難な、有難くない、そして殊の外危険な職分の遂行を以て輝やいてゐる——そういふ議員をもつた労働者黨が、ロシアには存在してゐた。上の方へ、上の方へと上つてゆく、即ち『威望ある』代議士または大臣の名聲を目宛てにする——これが實際において『ヨーロッパ的』な（お追從者的といふこと）『社會主義的』議會主義の合言葉だつた。底へ底へと下りて行く、即ち被搾取者および被壓迫者の啓蒙を助け、これを團結させる——これがムラノフおよびベトロフスキーの先例によつて提起された合言葉である。

そしてこの合言葉は世界史的意義に達してゐる。世界の如何なる國の如何なる思想的労働者も合法主義を以てするブルジョア議會主義の舊來の遂行に満足しないだらう、——この合法主義がす

べての先進國において一擧に撤廢されて、日和見主義とブルジョアジーとの事實上の同盟を一層緊密ならしむる結果に導くだけにすぎなかつた今日においては。×××社會民主主義労働者と、昨日の——そして今日の型の、合法的に働いてゐる『ヨーロッパ的』社會民主主義者との『協同一致』を夢想してゐる人間は、何物をも習得せずして一切を忘却してしまつた人間であり、實際においてブルジョアジーの同盟者にしてプロレタリアートの敵である。ロシア社會民主労働者派が、合法主義と日和見主義とで満足してゐた社會民主派と何故に且つ何のために分離してきたかを、今日にいたるまで理解しなかつた人間は、今ムラノフおよびベトロフスキーの活動に關する裁判記事から學ぶところがあらう。この活動はこの二名の議員によつて行はれたのみではない、そしてこの種の活動と、『ナーシヤ・サーリヤ』や『ゼヴェルナーヤ・ラボチャーヤ・ガゼッタ』や『ゾウレメンニク』等の新聞雑誌や、組織委員會やブンド派に對する友誼的な寛容な態度とを一致させ得ることを夢想するものは、救ひ難い無邪氣な人間だけである。

政府はロシア社會民主労働者派の所屬員をシベリアに送ることによつて、労働者を威嚇しようとして希望するのか？ 政府は血迷つてゐる。労働者は威嚇されずに、彼れ等の任務を、解黨派や排

外社會主義者と異つた労働者黨の任務を、一層よく遂行するだらう。労働者は議會にロシア社會民主労働者派の所屬員の如き一層のみを送ることを學ぶであらう、——大衆の間にこれと同様な、しかし一層廣汎な、と同時に一層××な仕事を行ふために。政府はロシアにおける『違法的議會主義』を絞め殺さうと企んでゐるのか？ 政府はプロレタリアートが専らこの種の議會主義のみに執着することを益々鞏固にするだけに終るだらう。

第三に——そしてこれが主要點だ——ロシア社會民主労働者派に關する裁判は、戰爭に對するロシア社會の種々の階級の態度といふ、最も重要な、最も根本的な、最も本質的な問題に對する公然たる客觀的資料——ロシアで數百萬部も弘布されてゐるところの——を供給してくれた『祖國擁護』と『原則的』な（文句だけの、または嘘つばちの、といふ意）インタナショナル主義とが調和され得るものであるといふ、あきあきする知識的饒舌はもう澤山ではないか。階級に關聯するところの事實、即ち一ダースばかりの言説の英雄に關するものでなく、生活に即してゐる數百萬の人間に關聯するところの事實を注視する時ではないだらうか？

開戦以來半箇年以上經過してゐる。あらゆる派の合法的並びに違法的新聞が現はれてきた。議

會のすべての黨群は結晶してしまつた——これはわが國の階級的分布を示すところの、極く不完全ではあるが唯一の客觀的指標である。ロシア社會民主労働者派に對する裁判と新聞の論調とは、この資料を要約したものである。裁判はロシアにおけるプロレタリアートの前衛が、一般に排外主義に對して敵對的であるばかりでなく、特にまた吾々の中央委員會と態度を共にしてゐることを示した。代議員は一九四年十一月四日に逮捕された。だから彼れ等は二ヶ月以上仕事をしたのだ。誰れと、そして如何にして、彼れ等は仕事をしたのか？ 労働階級の如何なる潮流を彼れ等は反映し、且つ表現したか？ これに對する答へは、吾々の『論策』と機關紙『ゾチアル・デモクラット』が會議のための資料の役をつとめたといふ事實、吾々の黨のペテルスブルグ委員會がそれと同じ内容の印刷物を以て再三活動したといふ事實によつて與へられてゐる。會議にはその外の資料は存しなかつた。代議員は労働階級内の他の諸潮流について會議に報告しようとしなかつた。何故なら他の諸潮流なるものは存在してゐなかつたから。

ロシア社會民主労働者派は多分労働者中の少數の意見を代表したのだらうか？ こういう想像をすることは正しくない、何故なら一九一二年春から一九一四年秋まで二箇年半のうちに、ロシ

アの階級意識のある労働者中の4/5が、わが二名の議員が示したような完全なる精神的團結を以て、『ブラウグ』紙を中心に集つたからである。これは事實だ。中央委員会の態度に對して、労働者の間に何等か感知される程度の反對が存してゐたとすれば、この反對は決議案となつて現はれたに相違ない。裁判はロシア社會民主労働者派の活動の多くを『白日の下に曝した』にも拘はらず、さういふ種類の決議案を少しも證據類として擧げなかつた。ベトロフスキーの筆蹟の校正刷を見ても、さういふ意見の相違の痕跡を毫も示してゐない。

すでに開戦後數箇月ならずして、ロシア労働者の階級意識のある前衛が、實際において吾々の黨の中央委員会と中央機關紙の周圍に集つてゐたことは、事實が示してゐる。この事實はあれやこれやの『分派』にとつては如何に氣に喰はぬものであらうとも——とにかく拒むべからざるものである。告訴状の中に引用されてある言葉、『X X 吾々に、他國の

すべての國のブルジョア政府および黨の反動派に向  
が必要だ——この言葉はX X  
のおかげで、プロレタリア・インタナショナル主義とプロレタリアX Xとに對する訴へとをロシア全國に運ぶだらう、そしてすでに運んでゐる。ロシア労働階級の前衛の階級的合言葉は、今や

—X Xのおかげで——最も廣汎なる大衆のもとに届いた。

ブルジョアジーと小ブルジョア團の一部分との疫病的排外主義、小ブルジョア團の他の部分の動搖、労働階級のこの訴へ——これがわが國の政治的成層の事實的、容觀的の圖面である。人は自己の『見込み』、希望、合言葉をこの事實的圖面に適應さすべきであつて、知識分子や小群團の創立者の空頼みに適應さすべきではない。

ブラウグ新聞と『ムラノフ流』の仕事とは、ロシアの階級意識のある労働者の4/5の統一をつくり出した。約四萬の労働者が『ブラウグ』を買つた、そしてヨリ以上の數がそれを讀んだ。戦争や牢獄やシベリヤや懲治監によつて、五倍、十倍の人間が打ち破られようとも、この層は絶滅することはできぬ。この層は生きてゐる。この層はX X精神と反排外主義とによつて貫かれてゐる。この層のみが民衆の間にあつて、その底の方で勤勞者、被搾取者、被壓迫者のインタナショナル主義の宣布者として働いてゐる。この層のみが全般的潰滅の中にあつて固く身を持してゐる。この層のみが半プロレタリア的諸層を、排外社會主義者から、カデット黨やトルードキキ黨やプレハノフの先きの方へ誘導する。この層の存在、この層の理念、この層の仕事、そして他の

諸國の賃銀奴隸の『同胞主義』への、この層の訴へは、ロシア社會民主労働者派に對する審問によつて、ロシア全國の前に表示されてゐる。

この層と共に動き、排外社會主義者に對してこの層の一致團結を擁護することが必要だ。こゝにいふ方法によつてのみロシアの労働者運動は、國民的自由主義的な『ヨーロッパ的』型の方でなく、××××の方向に發展することができる。

## ロンドン會議の機會に

一九一五年三月二十九日。(『ソチアル・デモクラット』第四〇號所載。)

吾人の發表せるロシア社會民主勞働者派中央委員會代表者、同志マキシモウィッチの聲明は、ロンドン會議に關するわが黨の見解を完全に表明せるものである。フランスのブルジョア新聞は、フランスのブルジョアジーを代表して、この會議の意義を單なる道具または擬勢と見做してゐる。役割は次ぎの如く振り當てられた。まづ「ル・タン」と「レコード・パリ」とはフランスの社會主義者を、インタナショナル主義に對して外見上過大な承認を與へた庵を以て攻撃した。この攻撃はヴィヴィアニ首相が愛國主義領土併合主義的態度を以て議會に臨む下地をつくるための擬勢にすぎなかつた。他方『ジュルナル』は眞正面からロンドン會議の眞相を摘發して次ぎの如く説いた。要するに従來ケヤ・ハーデーを先頭として、戦争および徴兵に反對してきたイギリス社會主義者が、ドイツに勝つまでは戦争に賛成することにしたのだと、これは由々しいことである。これは政治的には英佛兩國の社會主義者を、英佛ブルジョアジーの味方に引張り込んだことを意味する。かくてインタナショナル主義だの、社會主義だのといふ言説は、すべて單なる文句であり、何の意味もない空談なのだ！

フランス・ブルジョアジーの伶俐なる反動派は、疑ひもなく事の秘密を明かしたのである。この

戦争は英佛プラス露のブルジョアジーによつて、ドイツ、オーストリアおよびトルコを強奪する目的で行はれてゐるのだ。そのためには彼れ等は徴兵官を必要とし、ドイツに勝つまで戦争を繼續するために社會主義者の同意を必要とするのだ。そこで後に残るものはいへば、空つほな不眞面目な饒舌、社會主義だのインタナショナル主義だのといふ神聖な言葉の冒瀆である。實際上では、ブルジョアジーに従つて外國を強奪することに力を籍しながら、言葉の上では、『社會主義およびインタナショナル主義』の嘘つばちの承認で以て大衆を瞞着すること——こゝに日和見主義の主罪があり、こゝに第二インタナショナル崩壞の主要原因がある。

さればロンドン會議における排外社會主義者の反對者の任務は明瞭であつた。即ち明白な反排外主義の原則によつて——親獨主義に墮することなく——この會議を脱退することである。けだし親獨主義者は外の理由からでなく、取りも直さず排外主義の立場からロンドン會議に斷然反對してゐるのだからである。マキシモウィッチはドイツ社會主義者の裏切りを明言して、右の任務を遂行したのである。

ブンド派と組織委員會の一味徒黨とは、こゝにいふ簡單明瞭な事柄を理解することができないの

だ。前者はコソフスキー派の親獨主義者であつて、コソフスキーはドイツ社會民主黨が戦費を協賛したのを眞正面からは認してゐる（『インフォルマチオンズブラット・デス・ブンド』一九一五年一月、第七號、第七頁參照）。この機關紙の編輯部はコソフスキーを非難する言葉を一言も發表しなかつた（然るに彼れ等はロシア愛國主義の擁護者ポリソフに對しては、これと正反對の立場を示した）。ブンド派中央委員會の宣言（同第三頁）の中には、排外主義に對して一言の訣別の辭も記されてゐない！ 組織委員會の一味は親獨排外主義と親佛排外主義とを和解せると力んでゐる。これはアクセルロッドの聲明（『ゴロス』第八六號および第八七號所載）と、組織委員會國外幹部部發行『イズヴェステア』第一號（一九一五年二月二十二日）とを見れば明白である。『ナール・スラヴ』編輯部が吾人に向つて『官認排外社會主義』に對する共同動作を提議したとき、吾人は宣言草案を添付し、且つ同志マキシモウイチの斷乎たる聲明を引用して、組織委員會およびブンド派自身が官認愛國社會主義の側に立つてゐる旨を即答した。

『ナール・スラヴ』はこのことを第三十二號の社説で緘黙してゐるが、何のために自他を救ふ必要があるのか？ 吾人の宣言草案がドイツ社會民主黨の裏切りについて言葉を費してゐること

を、何故に『ナール・スラヴ』は緘黙してゐるのか？ 『ナール・スラヴ』の宣言はこの最も重要な、『根本的』な點を書き漏らした。吾人も同志マキシモウイチも、かゝる宣言を認容しなかつたし、また認容することができなかつた。そのために吾人と組織委員會との共同動作が成立しないのだ。何故に『ナール・スラヴ』は自他を救いて、共同動作のための土壌は現存してゐるなどと斷言するのか？

『官認愛國社會主義』——これこそ今日の社會主義の最惡の害毒である。この害毒を克服するため（この害毒と妥協したり、この點で相互に國際的「大救」を行つたりするためでなく）一切の勢力を用意し糾合しなければならぬ。カウツキー等は『大救』並びに排外社會主義との和睦といふハッキリした綱領を示してきた。これに反して吾人は排外社會主義の克服といふハッキリした綱領を與へるために努力した。そこで残るところは、『ナール・スラヴ』が『インクナシナル主義』に對するプラトンの同感」と、排外社會主義との妥協との間を右往左往する態度を棄てて、もつとハッキリした態度に移ることを希望するだけである。

排外社會主義者の詭辯

一九一五年五月一日。(『ソチアル・デモクラット』第四一號所載。)

ペトログラード解黨派の機關紙『ナーシエ・ディエーロ』(一九一五年第一號)は、カウツキーのパンフレット『國際精神と戦争』の翻譯を發表してゐる。その際にA. P. 氏は聲明して曰く、自分はカウツキーと同意見ではない、カウツキーは自分の見解によれば或る時は『辯護士』となり(即ち解黨派がフランス・ロシアの態度を取つたことを是認しないドイツ排外社會主義の擁護者の意)、或る時は『判事』となつてゐる(即ち客觀的にマルクスの方法を適用せんとするマルクス主義者の意)と。

本統のところはA. P. 氏とカウツキーとは大びらな詭辯を以て國民自由主義労働者政策を擁護してゐて、マルクス主義を徹底的に拋棄してゐるのである。A. P. 氏は讀者の注意を肝心の點から背かせて、カウツキーとつまらない點で議論してゐる。A. P. 氏の意見によれば、戦争に對する態度の問題を英佛『デモクラシー』(氏は労働者デモクラシーのことをそう呼んでゐる)によつて『決定』することは、一般に『正當な解決』である。『それ(英佛デモクラシー)は正しく振舞つた』、尤もその決意は意識的といふよりもむしろ『僥倖なる偶然によつて……國民の決意と合致してゐるのであるが。』

この言葉の意味は明白である。即ちA. P. 氏はイギリス人およびフランス人のおかげにかくれて三國同盟のロシア的排外主義を擁護してゐるのである。A. P. 氏はカウツキーと論争するに當つて、マルクス主義者が排外主義者と論争するのではなく、ロシアの排外主義がドイツの排外主義者と論争するように論争してゐる。それは胸糞のわるい方法である。たゞA. P. 氏は、氏の話のこゝろいふ簡單明瞭なる意味を、あらゆる手段を以てまわりくどく込み入らせてゐるといへば足りる。

A. P. 氏もカウツキーも同意してゐる點が一番肝心なところだ。たとへば兩者は近代プロレタリアートのインタナショナル主義は祖國擁護と合致するものだといふ點に同意してゐる。A. P. 氏は國家が『攻撃を受けた』特殊の状態を擧げてゐる。そしてカウツキーはこゝろ書いてゐる、『民衆は敵の侵入よりも怖れるものはない。民衆が

を、自國政府に認めずに隣邦の惡意に認めた時は(新聞紙その他の力をかりて民衆の間にそゝいふ見解を汪ぎ込まうとつとめないがあるだらうか!)……そゝいふ場合は民衆全體の間に、敵に對して國境を擁護せんとする舉國一致の努力が起るだらう。狂憤せる大衆は、國境に軍隊を出動させることを阻止せんとする者









るかを決定しなければならぬ、インドがイギリスから掠奪された方がよいか、フランスから掠奪された方がよいか、アフリカの黒人がフランス人によつてアルコール漬けにされて去勢されるのと、ドイツ人によつてそうされるのと孰れが有利か、トルコがドイツ人およびオーストリア人から絞め殺されるのと、イギリス人、フランス人とロシア人とからそうされるのと孰れが有利か、ベルギーがドイツ人に絞め殺されるのと、ガリシアがロシア人に絞め殺されるのと孰れがよいか、支那が×××に分割されるのとアメリカ人に分割されるのと孰れが有利かを決定しなければならぬ云々。

## インターナショナルと『祖國擁護』

一九一四年十二月十二日。『ソチアル・デモクラット』第三五號所載。

戦争は国際社会主義に深刻なる危機をもたらした。あらゆる危機と同じく現在の社会主義の危機も、社会主義の内部的対立を深刻に且つ明瞭に暴露し、幾多の傳統的な虚偽の被覆を剥ぎ取り、社会主義において如何なるものが腐敗し如何なるものが欠けてゐるか、社会主義のヨリ一層の發展と勝利のための運動とを保證するものは何であるかを、最も露骨な最も明瞭な形で示した。

ロシアの殆んどすべての社会民主主義者は、舊來の分類と分布とが古くさくなつた——とは言へぬにしても——變化してゐることを感じてゐる。正面に現れてきたものは、戦争によつて提起された根本的問題を中心としての分布、即ち『インタナショナル主義者』と『愛國社会主義者』との分類である。この名稱は『ナーシエ・スラヴァ』第四十二號の社説から借用したものであるが、XX社会民主主義者と國民自由主義労働者政治家とを對立させなければ完全ではないのだが、暫らくこの名稱をそのまま使用することにする。

だが勿論、名稱が肝心なのではない。現在の基本的分布の本質は『ナーシエ・スラヴァ』によつて正しく認められてゐる。曰く、インタナショナル主義者は『プレハノフによつて代表されてゐる如き愛國社会主義に對しては、一致して否定的態度を持してゐる……』と。そして『ナーシエ・スラ

ヴァ』編輯部は『現在分散してゐる集團』に對して、『ただ一つの行動——即ち現在の戦争とロシアの愛國社会主義とに對してロシア社会民主黨が態度を表明するといふ、せめてこの一つの行動のためにでも一致結合するよう』訴へてゐる。

『ナーシエ・スラヴァ』編輯部は、文筆上の論議だけに限らずに、吾人とオー・カー（組織委員會）とに向つて、この問題で——両者が参加して會議を開くことを文書で以て提議したのだ。吾人はこれに對する回答として、『根本問題について兩者の間に一致が成り立つかどうかを知るために、若干の豫備問題を解明する』必要があることを指摘した。吾人は主として二つの主要問題を提出した。一、如何なる宣言と雖も、『ロシアのプロレタリア前衛の意志を欺く』（『ナーシエ・スラヴァ』編輯部の表現による）『愛國社会主義者』の正體の暴露に役立ち得るものではない（わが編輯部はプレハノフ、アレキシンスキー、それからペテルスブルグ解黨派の或る文筆家仲間、それに雑誌Y・Zの一味徒黨の名前を擧げた）。それには長たらしい闘争が必要だ。二、何が必要で吾人はオー・カー（組織委員會）を『インタナショナル主義者』の中に數へなければならぬのか？

更らに組織委員會國外幹事部は、『ナーシエ・スラヴァ』に對する回答の寫しを吾人に送つてきた。

その回答は要するに、一派を選び出して「他派を除外する」ことは「暫時」禁ずること、「會議には、戦前にブリュッセルの國際社會主義事務局會議に参加した黨および團體の國外代表をも招待すべきこと」の二點に歸着する（一九一五年三月二十五日附書簡）。

故に組織委員會は原則上、インタナショナル主義者の會議を拒否し、愛國社會主義者とも會議したがつてゐるのだ（プレハノフ派とアレキシンスキー派とが戦前のブリュッセル會議に代表者を送つたのは周知のことである）。そしてネルヴィにおいてヤノフの報告に基いて可決された社會民主主義の決議（『ナーシエ・スラヴァ」第五十三號所載）も、全くこれと同一の意味を表してゐる（そしてこのブンド派代表者ヤノフの見解は、ブンド派中の大多數の左翼およびインタナショナル主義分子の意見を表明してゐるものなのである）。

この決議は國外においても幾多の人士によつて企てられてゐる『中央派』なるものゝ特徴を示す上に極めて價值のあるものであるが、その決議は『ナーシエ・スラヴァ』の『主義』に同感を表明しながら、同時に、「組織上に區劃を設けて、インタナショナル主義社會主義者の合同のみを専らにして、歴史的に發生した社會主義プロレタリア諸黨の分裂を是認する」『ナーシエ・スラヴァ』の

立場に反對の態度を示してゐる。故にネルヴィ會議は、この問題に對する雜誌『ナーシエ・スラヴァ』の『一面的解釋』を以て、『インタナショナル再建と關聯する任務の解明にとつて極めて有害なもの』と思惟してゐるのである。

吾々は以前に、組織委員會の公式代表者アクセルロッドの意見が排外社會主義であることを指摘した。これに對して『ナーシエ・スラヴァ』は誌上においても書面を以ても回答しなかつた。吾々はブンド派の態度もこれと同斷であつて、たゞこの一派の間には、親獨的排外主義が勢力を占めてゐる違ひがあるだけだといふことを指摘した。ネルヴィ決議はこれに對して、間接ながら極めて重要な確認を與へてゐる。即ちこの決議はインタナショナル主義者だけの合同は有害であり異端であると説いてゐる、かくて問題は何入によつても承認されるほど明瞭に提出されてゐるのである。

この問題に對して直接に且つ正式に態度を表明してゐる組織委員會の回答は、もつと明瞭であつて、愛國社會主義者なしで會議すべきでなく、彼れ等と一緒に會議すべきだと言つてゐる。

これはインタナショナル主義者の糾合といふ『ナーシエ・スラヴァ』の全理想が破綻したことを意

味するだらうか？ いな、どんなに會義の招集が不成功に終つても、精神的連結が保たれ、愛國社會主義克服の熱心なる希望が存する限りは、インタナショナル主義者の合同は停止されないだらう。『ナッシュ・スラヴァ』編輯部は日刊新聞といふ偉大なる武器を擁してゐる。彼れ等は會義や宣言なんかよりも、もつと實質的な、もつと重大な事柄を成就することができる。即ちすべての團體を動員して、しかも即刻に、一、インタナショナル主義の内容の問題について、完全な精密な、曖昧でない、絶對明白な解答の作成に着手することができる。(でないかと、ヴァンデルヴェルド、カウツキー、プレハノフ、レンシニ、ヘーニッシュまでがインタナショナル主義者と名乗つてゐる!)、更らに日和見主義について、第二インタナショナルの崩壊について、愛國社會主義との闘争の任務および手段等についてもそうすることができるし、二、あれやこれやの主義のための眞剣な戦ひに諸勢力を糾合することができる、しかも國外においてのみでなく、主としてロシアにおいてもそうすることができるのだ。

インタナショナル主義が愛國社會主義に對して勝利を得るには、これ以外の方法が存在しないし、またあり得ないといふことを、事實何人が否認する勇氣をもつてゐるだらうか？ ロシアに

おける半世紀の亡命史(そして三十年間の社會民主主義黨の亡命史)は、國外での如何なる宣言も會議も、ロシアにおける一つの社會層の持續的運動によつて支持されない時は、如何に無力であり、如何に輕微なものであり、如何に空想的なものであるかを立證しなかつたらうか？ 現在の戦争もまた吾々に、廢種したものや腐敗したもの、因襲的なものや外交的なものは只の一撃で悉く微塵になることを教へてゐないだらうか？

開戦以來八箇月のうちに、すべての社會民主主義的中心、團體、黨派、分派は、如何なるものと一語にやつて行けるかをすでに充分に考慮し、すでに充分に『宣言』してきた、即ち各自の意見を公然と表明してきた。今日の任務はこれと別種のもの、實質的なものである。裝飾用宣言や會議に對して、もつとも不信を表することだ！ 著述家や宣傳者や煽動者や、すべての思想的な労働者に精確な解答や忠言を與へることに、もつと精力を費やして、これらの忠言が不信を買はないようにすることだ！ 諸勢力を實現するといふ長々しい仕事のために、勢力を糾合するのだといふことを、もつと明白に、もつとハッキリと感ずることだ。

先きに述べたように、『ナッシュ・スラヴァ』編輯部は幾多の可能性を有してゐる——日刊新聞を

擁してゐるのだから！——それで彼れ等がこの『最底綱領』さへも履行しないなら、……編輯部に幾多のことを要望することができる。

一つの注意を加へておきたい。精確に五年以前の一九一〇年五月には、吾人は外國の雜誌で、極めて重大な政治的事實に論及したことがある——極めて『力強い』幾多の社會民主主義的中心の幾多の會議や宣言よりも、もつと『力強い』事實、即ちこの同じ雜誌X・Y・Zの合法主義著述家の一團の合同（ロシアでの）について論及したのだ。ロシアおよび全世界の勞働者運動の歴史に可なり豊富な事件が加つてきたこの五ヶ年の間に、右の事實はどんなことを示したか？ 國民自由主義勞働者黨（『ヨーロッパ』型の）分子を糾合するのための、或る一定の社會的核心がロシアに存在してゐることを示さなかつたらうか？ 今日ロシアにはそらいふ黨派だけの公然たる進軍、『ナール・ディエーロ』、マスロフ、ブレハノフその他の進軍が行はれてゐるといふ狀勢から、すべての社會民主主義者は如何なる結論を引き出す義務があるだらうか？

繰返して言ふ。飾り物式宣言に對してもつと不信を表し、もつと勇氣を出して深刻なる政治的現實を直視することだ！

## ブルジョア博愛主義者と革命的社會民主黨

一九一五年五月一日。（『ソチアル・デモクラット』第四一號所載。）







吾人は「ナールシエ・スラヴォ」がそのインタナショナル主義を眞剣に考へるつもりなら、その政綱の精密なる説明をかりげねばならぬといふことを、すでに述べた。「ナールシエ・スラヴォ」第八五號には、謂はゞ吾人に對する回答として、「ナールシエ・スラヴォ」のパリ同人評議員會の下に編輯部によつて採用された決議文を掲載してゐる。この決議が採用された際に二人の編輯部員は、「決議の内容とは意見が一致したが、ロシアにおける黨の政策の組織方法については意見を異にしてゐると聲明した」といふ。この決議は政治的無思慮と不確實とを示す極めて注目すべき文書である。

この決議はインタナショナル主義といふ言葉を何回となく繰返へし、「國民社會主義のあらゆる亞種との完全なる精神的分離」を宣し、またシュツットガルトやバーゼルの決議を引用してゐる。良い心がけだ、疑ひもなく。たゞ……たゞそんなことができるのは文句の上だけである。けだし排外社會主義の本統に「すべて」の亞種との、本統に「完全」な絶縁などはできないし、またするに當らないのは、資本主義の敵たるには、資本主義的搾取のすべての亞種を完全に數へ上げるに當らないのと同様である。たゞそのうちの最も重要な「亞種」、たとへばブレハノフだとかポトレソフ（「ナールシエ・ディエロ」）だとか、ブンド派、アクセルロッド、カウツキーだとか、そつといふ「亞

種」とだけは、疑ひもなく手を切ることができるし、また手を切る必要がある。この決議は約束ばかり多くて、その實、約束を一つも守つてゐない。すべての亞種と完全に手を切るなどと言つて嚇かしながら、そのうちの最も重要なものゝ名を數へあげることさへ怖れてゐるのだ。

『……イギリスの議院では誰れのことでも名前を擧げて言ふことは失禮なことゝ見做され、單に『高貴なる貴族諸卿』とか、何々區選出の『尊敬すべき代議士諸君』とか言ふだけである。』この「ナールシエ・スラヴォ」の人士は何といふ立派なイギリス崇拜者、何といふ高雅な外交官だらう。彼れ等は事物の本質をこんなに優雅に回避し、自分の思想を隠蔽するに都合のよい方式を、こんなに懇懇に讀者に御馳走してくれる。彼れ等は「×××インタナショナル主義の原則に従つてゐる限りは「すべての團體と「友誼的關係」（ツルゲネフの小説の主人公の言葉をかりるなら——ギゾー、何から何までギゾーだ！）を保持することを宣言しながら……事實はこの原則に従はない團體とのみ「友誼的關係」を保つてゐるのだ。

「ナールシエ・スラヴォ」の人士がこんなに堂々と『精神的絶縁』を宣言しながら、これを守らうとしなければ、守ることもできないといふことは、排外社會主義なるものは何處から發生したか、

何處から力を得てゐるか、如何にしてこれを克服すべきかを説明するものである。國民社會主義者は自分のことを國民社會主義者と呼んでもゐなければ、國民社會主義者たることを欲しもしない。彼れ等はあらゆる努力を拂つて或る偽名の下に隠れ、労働大衆の目をくらまし、日和見主義と結托してゐる痕跡を拭ひ去り、自分等の裏切り、即ち事實上ブルジョアジーの陣營に移つて政府や參謀本部と結托してゐることを、隠蔽しようとしてゐる（そして彼れ等はそうするのが當然である）。今や國民社會主義者はこゝにいふ結托を足場にし、あらゆる切り札を掌中に持ちながら、社會民主諸黨の『協同一致』を何よりも罵り、日和見主義の敵に對して異端呼ばはりをしてゐる。（本統の、インタナショナル主義雑誌『リヒトシュトラレン』と『インテルナチオナール』とに對するドイツ社會民主黨幹部の最近の公式回章を想起せよ。これらの雑誌は革命家との『友誼的關係』または『國民社會主義のすべての亞種との完全なる精神的絶縁』を聲明する必要を見たのである。そして即座にこの精神的絶縁に取りかかり、そのために日和見主義者の『すべての亞種』は、實際に狂氣の如く咆哮を揚げ、急所を射られたことを證據立てたのである。）

そして『ナーシエ・スラヴァ』は？

それは國民社會主義に對して跪坐しつゝ叛いてゐる。何故なら『ナーシエ・スラヴァ』はこのブルジョアの傾向（カウツキー流における）の最も危険なる信奉者の正體を少しも暴露してゐないからだ。それは日和見主義に宣戰することなく、反對に沈黙を以て日和見主義に投じ、社會主義を不面目なる愛國主義の虜から解放するために、何等實行を企ても示しもしてゐない。『ナーシエ・スラヴァ』は言ふ、協同一致は必要缺くべからざるものでもなく、ブルジョアジーに投じた者と分裂することも必要ではないと——こうして事實上日和見主義者に降服してゐるのだ。しかもその際一方で日和見主義者を威嚇しながら、一方で日和見主義者に色目を使つてゐるようを受取られるような見事な思はせ振りを演じてゐるのだ。急進的に聞える文句と微温的な實踐との結合の値打ちを能く知り抜いてゐる眞の老巧なる日和見主義者は、『ナーシエ・スラヴァ』の決議に對して、略々二人の編輯部員が答へたように答へるに違ひない（回答することを餘儀なくされた場合は）——曰く、吾々は決議の『一般的内容』とは意見が一致してゐる（何故なら吾々は決して國民社會主義者ではないのだから、その痕跡もないのだから！）しかし『黨の政策の組織方法』に關しては、時機を見て吾々の特別の意見を發表するだらうと。これで誰れも傷つかずに萬人が満足するのだ。

『ナールシエ・スラヴァ』の狡猾なる外交術は、ロシアのことを述べ始める必要に迫られた時には頓挫してしまつた。

『黨の合同はロシアでは、これまでの時期の事情の下においては不可能であることを立證した』と、決議は説いてゐる。その意は、労働者黨が合法主義者解黨派の集團と合同することは、不可能であることを立證したといふことである。——これは解黨派救済のためのブリュッセル聯盟の崩壊を間接に認めたことになる。何故に『ナールシエ・スラヴァ』はこの崩壊を公然と承認することを怖れてゐるのか？ 何故にこの崩壊の原因を労働者の前に公然と示すことを怖れてゐるのか？ 『ナールシエ・スラヴァ』が二つの（二つより少くない）『亞種』の國民社會主義と『友誼的關係』を維持したがつてゐるからではないか、即ち新聞紙にブリュッセル聯盟の再建の意味の聲明を發してゐるブンド派および組織委員會（アクセルロッド）と苟合したがつてゐるからではないか？

『新たなる事情は舊來の諸分派の脚下にある地盤を覆へしつゝある。……』

それは逆ではないか？ 新たなる事情は解黨主義を決して廢除しなかつた。解黨主義はその核心（『ナールシエ・スラヴァ』）に幾多の人的變動と層の變化とがあつたにも拘らず微動だもしてゐな

い。新たなる事情は解黨主義から一層外れてゆくことを深刻にただけである、何故ならその核心が今まで解黨主義だつたのが、今度はその上に國民社會主義となつたのだから！ 『ナールシエ・スラヴァ』は古きものは新しきものによつて覆へられたなどと言つて、寢ざめのよくない解黨主義の問題なんか曖にも出さず、舊來の解黨主義の脚下にある、新たな國民社會主義といふ地盤のことは口を噤んでゐる！ 實に重寶なおしやべりだ。吾人もこれからは『ナールシエ・スラヴァ』のことは緘黙しよう、そんなものはもう存在してゐないのだから。『ナールシエ・ディエーロ』も同断だ、ポトレツフ、チェレワーニン、マスロフ一味なんかは政治上の赤ん坊と見做して差支へないのだから。ところがポトレツフ一味と限らず、『ナールシエ・スラヴァ』の編輯者も自分を赤ん坊と見做したがつてゐる。次ぎの言葉を聞け——

『以前の時期につくり出された分派のおよび分派間の分布は、現在の過渡的時機においても、極めて不完全ながら進歩的労働者の組織的糾合に役立つ唯一の（注意せよ！）點であることに鑑み、『ナールシエ・スラヴァ』は、インタナショナル主義者を糾合するといふ吾が根本的仕事の利益から見、本紙を舊來の黨派中の一つに直接間接に従屬させるをも、本紙の同志を政治的に舊來の黨

派と對立すべき特別の一分派に人爲的に糾合することを、決してしないといふ意見である。』

どういふわけか？ 曰く、新事情が舊來の黨派を覆へしたが故に、吾々は舊來の黨派を唯一の實在的なものと認める。新事情は解黨主義の問題でなくインタナショナル主義の問題について新たな黨派を要求してゐるが故に、そのために吾々はインタナショナル主義者の糾合を『人爲的』として斥ける！ これが本統の政治的無力の權化だ。

二百日間に亘るインタナショナル主義の宣傳の後、『ナーシエ・スラヴァ』は自己の完全なる政治的破産を自認してゐる。——舊來のものに『從屬』しない（こんな驚くべき言葉を何故使ふのか？ 何故『加入する』『支持する』『共同する』と言はないのだ？）また新しいものも造らない。吾々は從來通りに解黨派の中に生活し、解黨派に『從屬』する、そしてわが『ナーシエ・スラヴァ』はどこまでも一種の山師的看板か、インタナショナル主義文献の庭園における散策場としてとゞまるといふのだ。そして『ナーシエ・スラヴァ』の記者は次ぎの如く書くだらう。……

二百日の間吾々はインタナショナル主義者の糾合を説いてきたが、今や吾々は何人とも、それどころか『ナーシエ・スラヴァ』の編輯者や同人とも、絶対に一諸になることができない、そして吾々

はかゝる合同を『人爲的』と宣言すると。ポトレソフ、ブンド派、アクセルロッドにとつては何といふ勝利だ！ そして労働者に對する何といふ老練な欺瞞だ！ 正面からは——傳來の舊黨派から超脱せる『ナーシエ・スラヴァ』の有効なるインタナショナル主義の説教、そして背面からは——糾合の唯一の點、これが即ち舊黨派……

茲に『ナーシエ・スラヴァ』が記録した精神的政治的失策は何等偶然ではなく、現實の勢力關係を輕視せんとする企圖の必然的結果である。ロシアの労働者運動におけるこの勢力關係は、要するに解黨派および愛國社會主義者（『ナーシエ・ディエーロ』）の一派と、一九二二年の一月會議で再建され、第四回國會の労働者議員の選舉によつて固められ、一九二一—二四年のプラウダ新聞によつて強固にされ、ロシア社會民主労働派によつて代表されてゐるところの、マルクス主義社會民主主義労働者黨との闘争に歸する。この黨は解黨主義のブルジョア派との闘争を、同じく愛國社會主義ブルジョア派との闘争において繼續してきてゐる。この黨、吾々の黨の行動の正しいことは、歐洲戦争の強大なる歴史的世界的經驗と、『ナーシエ・スラヴァ』の最近の、千年に一度の珍しい合同計劃の、實に微小なる經驗とによつて確證された。この合同計劃は『プラトンの』イン

タナシヨナル主義者に關するベルン會議の決議を證認したために失敗に歸したのである。  
本統のインタナシヨナル主義者は舊來の解解派の中にも留まることも欲しなれば、あらゆる黨  
派の外郭に立つことも欲しないだらう。本統のインタナシヨナル主義者こそは吾々の黨に來るだら  
う。

## 排外社會主義者との鬭争について

一九一五年六月一日。(『ソチアル・デモクラット』第四二號附録。)

最近ベルンに開かれた國際社會主義婦人會議はこの現實問題について最も興味ある最も新しい資料を提供した。こゝにこの問題の一面を論じたい。

ロシア組織委員會婦人團體代表者、オランダのトレルストラ黨の代表者、『ベルナー・ターグワハト』紙によつて外見上あまりに左翼的な態度のために烈しく攻撃されてゐるスキス婦人團體代表者、幾分でも重大な問題では官認の黨(周知の如く排外主義を基礎としてゐる)と決して分れたがらないフランスの婦人代表者、平和主義を×××プロレタリアの戦術から明白に引き離す思想には反對してゐるイギリスの婦人代表者——すべてこれらの人々は或る決議で『左翼』ドイツ社會民主主義と一致してゐる。わが黨の中央委員會派遣の婦人團體代表者は彼れ等と分離して、さういふ同盟に参加するよりも暫らく一人で止まることを撰んだ。

この意見の相違の主眼は何處にあるか？ この意見の相違は如何なる原則上および一般に政治上の意義をもつてゐるか？

一見したところでは、日和見主義者と一部左翼とを糾合するこの『中央的』決議は、極めて穩當であり正當であるように見える。この決議は戦争を帝國主義戦争と認めてゐるし、

の

思想を排斥してゐるし、労働者に大衆示威運動その他を叫んでゐる。そこで吾々の決議と異なる點は、單に幾分表現が烈しいといふ點、たとへば『裏切り』だの『日和見主義』だの『ブルジョア内閣よりの脱退』だのといふ表現が用ゐられてゐる點だけだと信じられるかも知れぬ。

わが黨の中央委員會派遣の婦人團體代表者の分離を批評せんとする人々は、疑ひもなくさういふ見地から出發するだらう。

しかし事柄をもつと細心に觀察し、あれやこれやの眞理の『形式的』承認の點だけに觀察を限りさへしなければ、右の如き批評が全然當つてゐないものであることを見抜くことができる。

會議では二つの世界觀が、戦争とインタナショナルの任務とに關する二つの判斷が、プロレタリア黨の二つの戦術が、衝突したのだ。一方の見解は次ぎの如く主張する。曰く、インタナショナルの崩壞なんか少しも起きなかつた、排外主義から社會主義に復歸することに何等根柢のある重大な障礙は存在してゐない、日和見主義といふ姿を取つた強大な『内』敵は存在してゐない、社會主義に對する直接の明々白々な裏切りなんか少しも行はれなかつた。さういふ見解から次ぎの結論が出てくる。曰く、吾人は何人をも咎めたくない、吾人はシュワットガルトおよびパーゼルの



決議の拒絶者に大赦を與へたい、そして左方に舵を向け、大衆に示威運動を訴へるように忠告を與へるだけに止めたいと思ふ。

もう一方の見解は以上のすべての問題について正反對である。日和見主義者および排外社會主義者に向つて黨外交を續けるよりも、プロレタリア運動にとつて有害であり、禍を與へるものはない。會議における多數派の決議が、日和見主義者や現在の官認の黨の一味徒黨に受け容れられたのは、その決議が徹頭徹尾外交の精神を以て貫かれてゐるからである。この決議は現在のところ官認愛國社會主義者によつて指導されてゐる労働大衆を、さういふ外交で以て欺いてゐる。現在の社會民主黨と現在の政府とは、針路を變へて間違つた方向から正しい方向に轉ずる能力があるといふ、大間違ひの有害な思想を労働大衆に注ぎ込んでゐる。

そんな能力があるといふのは誤りだ。根本的な、此の上なく有害な誤りだ。現在の社會民主黨とその政府とは、眞面目に自己の針路を變へる能力はない。事實の上では一切が従前通りなのであつて、多數派の決議に表明されてゐる『左翼』的希望は、いつまでも空頼みとして終るだらう——トレストラ黨や現在のフランス黨幹部の一味婦人代議員は、間違ひのない政治的本能で以て

さういふことを見抜いたので、右の決議に賛成したのだ。大衆に示威運動を訴へるのは、現在の社會民主黨幹部の極めて能動的な支持があつた時にのみ、實際的な、事實上の、眞面目な意義が出てくるのだ。

さういふ支持を彼れ等に期待できるだらうか？ 明かにできない。言ふまでもなくさういふ訴へは、政府側から激烈な（そして大多數の場合婉曲な）反對を受け、決して支持は得られないだらう。

さういふことを労働者に卒直に告げるとしたら、労働者は眞理を悟るに相違ない。即ち労働者は『左翼』的希望を實現するには社會民主黨の針路を根本的に變更すること、日和見主義者とその中央派の盟友とに對して頑強に闘争することが必要であることを悟るに相違ない。然るに人々は労働者に向つて、これこれの害悪があつて、この害悪を克服しなければ、この左翼的希望はいつまでも實現され得ないといふことを、明瞭に指摘することを卑しめて、労働者をたゞ左翼的希望で以て寝かす附けてゐるのだ。

現在の社會民主黨における外交的指導者、排外主義政策の創始者等は、多數派の決議の弱點、

優柔不斷を利用することを能くするだらう。海山千年の國會議員たる彼れ等は仲間同志に二つの役割を振りあてらるだらう。一方の仲間、カウツキー組はこう言ふだらう、會議では「眞面目」な議論が一向顧られず、考慮されなかつた——それで吾々は議論をもつと廣い土臺の上に置きたいと思ふと。もう一方の仲間はこういふだらう、見給へ、深刻な意見の相違は少しもなかつた、トレルストラ黨やゲード・ザンバー黨の一味代議員とドイツの左翼代議員とは一致したと、吾々が言つたのは間違ひではなかつたではないかと。

苟くも社會主義婦人會議なら、シャイデマン、ハーゼ、カウツキー、ヴァンデルヴェルド、ハイन्दマン、ゲードおよびザンバー、ブレハノフ等を扶けて労働大衆を寝かし附けるようなことはせず、労働大衆を揺り起して日和見主義に決戦を宣すべき筈であつた。そうしなへすれば實際上の結果は——右に擧げた『指導者』の『匡正』を希望することではなく、必死の闘争のために勢力を糾合することゝなつた筈である。

日和見主義者と『中央派』とによるシュツットガルトおよびバーゼル決議の蹂躪の問題を考へよ、まさにこの點にひつかゝりがあるのだ！ 外交を用ひずに事柄を赤裸々に思ひ浮べて見よ。

インタナショナルが戦争を豫想して大會を開いて、開戦の場合には「資本主義×××××」にとめること、パリ・コン・ミン、一九〇五年十月および十二月（バーゼル決議は精確にそう言ひ現はしてゐるのだ!!）の意味で力をつくすこと、一國の労働者が他國の労働者を××××××××は『犯罪』の烙印を捺されるといふ精神で以て働らくことを、満場一致で決議してゐる。

國際的×××プロレタリア精神を以てする作業の指針は、茲に全く明瞭に書き出されてゐる。合法の範圍ではこれ以上に明瞭に言ひ現はせないほどに明瞭に書き出されてゐる。

そして戦争が起きた。バーゼル大會で豫想されたと寸分違はぬ戦争が、寸分違はぬ方向に起きた。然るに官認の社會民主諸黨は丁度それと正反對の意味に行動してゐる——インタナショナル主義者としてではなく、國民主義者として、プロレタリア的ではなく、ブルジョア的に、×××的ではなく、徹底的に日和見主義的に。そこで吾々が労働者に向つて、社會主義に對する裏切りが起つたと言ふなら、この一言で以てカウツキーおよびアクセルロッド流のあらゆる逃げ口上と言ひ譯け、あらゆる諛辯を一撃で排斥することになるのだ。そして禍の如何に強大深刻なものであるかを明瞭に指摘し、禍の清算でなく、禍との闘争を労働者に明白に訴へることになるのだ。

然るに多数派の決議は如何。裏切りに對する斷罪の言葉は一言もなく、日和見主義に對する訣別の言葉は一言もなく、バーゼル決議の思想の單なる繰返しただけだ!! 恰かも何等重大なことが起きなかつたかのように、——ほんの偶然に小さな過失があつただけだ、昔の決議を繰返へすだけで澤山なのだ、原則上でない表面的な意見の相違があつただけだ、この意見の相違をうまく取り濟せばよいのだ!!

これはインタナショナルの決議を眞正面から愚弄することであり、労働者を愚弄することである。然り、排外社會主義者は決議を單に繰返へすだけで、實際上は何も變り事がないように欲してゐるだけである。これは根本的に見れば現在の諸黨の多数派の排外社會主義的一味徒黨を、暗々裡に、且つ何の彼のと胡麻化して大赦することである。吾人は二三の急進的な文句を弄するだけで右の道を辿りたがつてゐる無數の『翫賞家』が存在してゐることを知る。こういう人間は吾々の間には見出せない。吾々は別の道を辿つてきたし、これからも別の道を辿らう、吾々は労働者運動と労働者黨の竣成とを行動によつて、日和見主義と排外主義とに對する一步も妥協しない精神を以て促進することに努める。

ドイツの婦人代議員の一部は、この決議がたゞ一つだけの、即ちドイツだけの黨の内部における排外主義との鬭争の發展の速度を専ら論じてゐるといふ懸念から、明瞭な意見を發表した決議を採用することを明かに尻込みしてゐる。しかしそんな理窟は言ふ迄もなく理窟にならない間違つたものである。何故なら國際的決議は一般に排外主義に對する個々の國々における鬭争の進行や、具體的鬭争條件なんかに觸れたものではないからである。そういう方面では個々の黨が自治權を與へられてゐることは勿論のことである。社會民主主義的作業の全體的方向、全體的性质における排外社會主義との斷乎たる絶縁を、國際的演壇から宣布することが必要だつたのだ。然るに多数派の決議はそうはせず昔の過ちをもう一度繰返へした、即ち日和見主義を糊塗し言行の不一致を外交的辭令で隠蔽する第二インタナショナルの過ちを再び繰返へしたのだ。吾々はもう一度聲明する、吾々はそういう道は辿らないだらう。

帝國主義戦争における  
の  
敗北について

一九一五年六月二十六日。(『ソチアル・デモクラット』第四三號所載。)

反動的戦争においては×××階級は

の×××××せざるを得ない。

これは一つの公理である。そしてこれは排外社会主義者の意識的信奉者、または無能なる助者のみが反対するところである。前者にはたとへば組織委員会のゼムコフスキーが属し、後者はロシアではトロツキーおよびブクサイエド、ドイツではカウツキーが属する。トロツキーはこう書いてゐる、ロシアの敗北の希望は、『愛国社会主義の政治的方法論に對する、何物によつても所望されず何物によつても是認されざる讓歩』であつて、この方法論は『戦争および戦争を惹起せる事情に對する×××闘争の代りに、一番害悪の少ない方向に對して、その場合々々に極めて氣まゝに針路を向けるものである』(「ナーシユ・スラヴ」第一〇五號)。

トロツキーはこふいふ傲然たる文句でつねに日和見主義を辯護してゐる、これがその見本である。『戦争に對する×××××』といふことは、これを自國政府に對する、そして戦争中における×××××と解しないならば、第二インタナショナルの主人公どもが現に巧みにお手のものとしてゐるところの、空虚な無内容な叫びとなる。一寸考へさへすればそうであることが分かる。そして戦争中における自國政府の×××××は、確かに疑ひもなく自國政府の×××に對する希望を

意味するのではなく、さういふ×××を事實上に促進することを意味する(『聰明』な讀者のために言つておくが、これは『橋を壊はしたり』 ストライキを演じたり、一般に××××××××××

×××をもたらしたりしなければならぬ、といふことを少しも意味するのではない)。

トロツキーは文句だけを事としてゐるが、それにしてもおそろしく混亂してゐる。彼れはロシアの敗北を希望することは、ドイツの勝利を希望することだと信じてゐる(ブクサイエドとゼムコフスキーとは、トロツキーと共有のこふいふ『思想』、——もつと正確に言へば無思想を、もつと直接的に言ひ現はしてゐる)。そしてこの點にトロツキーは『愛国社会主義的方法論』を認めてゐるのだ! 考へることのできない人士に嚙んで含めるように、ベルン決議は説いて聞かせた、『すべての帝國主義において、プロレタリアートは ×××××を希望しなければならぬ』と、ブクサイエドとトロツキーとは、この眞理を見落すことを都合よしとした、そしてゼムコフスキー(ブルジョア的知識を大びらに無邪氣に繰返へして聞かせることによつて、労働階級に最も多く裨益してゐる日和見主義者、このゼムコフスキーは『可憐』にも言つた、『これは不條理だ、ドイツがロシアか、どつちか々勝ち得る』と。

たとへばバリ・コンミュンを考へて見給へ。ドイツはフランスに勝つた、そしてビスマルクがチ

エールと共に労働者に勝つたのだ！ もしもブクアイェドとトロツキーが反省するならば、自分等が政府およびブルジョアジの戦争の立場に立つてゐること、即ち——トロツキーの選擇した言葉でいへば——『愛國社會主義の政治的方法論』の前に平伏してゐることを悟るに相違ない。

戦争中における××は××である、そして一面には政府の戦争を×××

××××××××××によつて容易にされ、他面において××を

ういふ誘導に努めることは不可能である。

そのために排外主義者は（組織委員会やチハイゼ派と共に）××といふ『標語』について何物をも知りたがらないのだ、何故ならこの標語は戦争中における自國政府に對する××××××の徹底的訴へのみを意味するからである。そしてこゝにいふ行動に比べれば、戦争に對する戦争だとか、何だとかいふ幾百萬の××的文句も一文の値打ちもない。

帝國主義戦争における自國政府の×××『標語』を眞面目に

の事柄のうちの一つを立證しなければなるまい。一、一九一四年の戦争は反動的なものであるこ

と、二、戦争に關聯させての××

あること、または、三、すべての交戦國における×

×運動の××××××××不可能であること。後者の議論はロシアにとつては特に重要である、けだしロシアは最も進歩におくれた國であつて、そこでは社會主義運動が直接には不可能だからである、まさにその故にロシア社會民主主義者は、理論および實踐において、××の『標語』をかゝげた最初の社會民主主義者たるに至つたのである。ロシア社會民主労働者黨の煽動は議會における反對のためのみならず、××××××に對する本統に×××

のためにも、インタナシヨナルにおける唯一の手本であり、この行動はロシアの××××××を弱め、××を促進するものであることを、ツァール政府が知つてゐるのは全く正當のことである、これは一つの事實である、この事實に眼を塞がうといふのは、賢い人間のすることではない。

××の標語の反對者は、單に自分ひとりで氣遣つてゐるだけで、政府に對する××××××××の招致との間に、疑ひのない連絡が存してゐる事實を認めなければならない。

ロシアにおけるブルジョア民主主義運動と西ヨーロッパにおける社會主義運動との照應および協働は可能だらうか？ 過去十年の間社會主義者は誰れ一人それを疑ふことなく、公然とそれを口







『勝利でもなく敗北でもなく』といふ標語に左祖する人間は、誰れでも意識的にか無意識的にか、高々調停的な小ブルジョアたる排外主義者なのであつて、プロレタリア政策の敵であり、今日のXXおよび支配階級の信奉者である。

問題をもう一つ別の方面から考察しよう。戦争は半睡的の氣もちの普通の状態を打破する最も迫進的な感情を、大衆の中に解放せざるを得ないものである。そしてこの新たな迫進的な感情に順應せずしては、如何なるXXも不可能である。

この迫進的感情の主要潮流は何であるか？ 一、絶望と恐怖。それで——教會が有力になる。教會は再び人でいづばいになり出し、——反動派が歡呼する。『悔みあるところに教會あり』と、反動派の首魁バレスが言つてゐる。そして彼れがそう言つてゐるのは正しい。二、『敵』に對する憎悪は、坊主よりもブルジョアジーによつて特に焚きつけられる感情であつて、彼れ等にとつてのみ政治上および經濟上に有力なものである。三、自國XXおよびブルジョアジーに對するXXは、すべての階級意識ある労働者の感情にあつて、これらの労働者は、一方においては、戦争は帝國主義の政策の繼續であることを看破し、それに對して自己の階級敵に

『繼續』を

以て答へるが、他方においては、『戦争に對する戦争』は、自國XX×××××なしには下らな

い空文句であることを理解してゐる。XXおよびブルジョアジーにXX××希望せずしては、

彼れ等に對する憎悪を生み出すことはできぬ——そして自國XXおよびブルジョアジーに對する

惹き起さなければ、舉國一致に對する欺瞞的反對者以外の何者でもあり得ないのだ！！

『勝利でもなく敗北でもなく』といふ標語の信奉者は、事實上ブルジョアジーと日和見主義者の味方に付き、XX××に對する労働階級の國際的XX××行動の

『信ぜず』、そ

ういふ行動——これこそは疑ひもなく困難な任務ではあるが、プロレタリアートに値ひする唯一の社會主義的任務である——を希望しない。取りも直さず交戦強大國中の最も進歩におくれてゐる國のプロレタリアートが、黨の形を取れる獨佛社會民主主義の不眞目なる裏切りを目前にして、XX××

を以て起たなければならなかつた。その戦術は自國XX××『XXの

』なしには絶對的に不可

能であるが、たゞこの戦術のみがヨーロッパXX

のヨリ確實な平和に導き、

今日はびこつてゐる暴虐、苦患、荒廢および動物扱ひから人類を脱却せしむるに至るのである。

ロシア社會民主黨の事情について

一九一五年七月二十六日。(『ソチアル・デモクラット』第四三號所載。)

組織委員會の『イズヴェスチヤ』第二號、同じく『ナーシエ・ディエーロ』第二號は、極めて直載明瞭に狀勢を明かにしてゐる。兩者をもそれ／＼の發行地や政治的性質に應じて、それ／＼獨特の様式を取つて排外社會主義を固めるために確實なる一步を進めてゐる。

『ナーシエ・ディエーロ』は編輯部内部における意見の相違や主張の濃淡については一言も報道することなく、またポトレツフに反對の主張を一言も發しないばかりか、反つて編輯部の特別の聲明書を以てポトレツフと協同して、『インタナショナル主義』は現在の戦争において孰れのブルジョアジーの成功がプロレタリアートに取つて望ましいかといふことを決定する『指針』を必要としてゐると考へてゐる。これは本質において編輯部全體が排外社會主義であることを意味する。それにこの編輯部はカウツキーと排外社會主義の濃淡を異にしてゐるに過ぎず、専ら自分の立場の實際的辯明に捧げてゐるカウツキーのパンフレットを、『見事』だの『餘蘊なし』だの『理論的に貴重』だのと賞揚してゐる。『ナーシエ・ディエーロ』編輯部はこういう具合に、第一にロシアの排外主義を是認し、第二に國際的排外社會主義を『大赦』して、それと仲直りすることを聲明せんとしてゐることは、故意に眼を閉ぢない限りは誰れでも認めるに相違ない。

編輯部は『ロシアおよび外國を通じて』といふ標題で、ブレハノフとアクセルロッドの意見を調停して、兩者の間に何條差別を置いてゐない（尤もこれだけは正常なことである）。そして特別の注意書の中で、矢張り編輯部の名を以て（第一〇三頁）、ブレハノフの見解は『ナーシエ・ディエーロ』の見解と『幾多の點で』一致すると述べてゐる。

そこで光景は一目瞭然だ。『ナーシエ・ディエーロ』となつて體現してゐるこの合法主義者の一派は、自由主義ブルジョアジーと十重二十重に結合してゐるおかげで、一九一〇—一五年における『ブリュッセル聯盟』の中で、ロシアにおいて唯一の實在性を現はしてゐたものであるが、この一派はこのように解黨主義を排外社會主義で以て補充することによつて、彼れ等の日和見主義的發展を徹底的に固め、且つ完成した。一九一二年一月わが黨から排除された此の集團の、事實上の綱領は、格別に重大な一點が加つて一層の豊富を加へた。即ち要するに地主およびブルジョアジーの主權および特權を擁護して、戦争を暗してもこれを強固にすることが必要であるといふ思想の宣である。

こういう政治上の實相を『左翼』的文句と社會民主主義めいた思想で隠蔽すること——これが

チヘイゼ一派の合法的活動と組織委員會の違法的活動との眞の政治的意義である。精神的方面では——『勝利でもなく敗北でもなく』といふ標語、實際的方面では——異端者との鬭争、(この鬭争は『イズヴュスチャ』第二號の文字通りすべての論文に漲つてゐる、特にマルトフ、ヤノフ、マシナーゼの論文はそうである)——これが『ナーシエ・ディエーロ』やブレハノフとの『講和』の實質的な、且つ(日和見主義者の見地から見て)徹頭徹尾正常な綱領である。『リエッチ』第一四三號(一九一五年五月二十七日)に、民主主義の義務として國土の擁護を説いた『往時の革命家』アレキシンスキーの書簡を読むならば、現排外社會主義者ブレハノフの善良なる此の揮擔きは、『勝利でもなく敗北でもなく』といふ標語で以て徹頭徹尾満足しようとしてゐるのを認めるだらう。この標語こそは取りも直さずブレハノフ、『ナーシエ・ディエーロ』、アクセルロッドとカソフスキー、マルトフとゼムコフスキーの共同標語である。彼れ等の間には慥かに(然り、慥かに!)正式に許された『主張の濃淡』と『個々の意見の相違』とが存するのだらう。しかもこの仲間全體は『勝利でもなく敗北でもなく』といふ共同の足場を見出して、一番肝心な點で思想上の一致を見てゐる。(因みに、誰れの勝利、誰れの敗北なのだ? 勿論、現在の××の、現在の支配階級のだ!)彼れ

等は實際政策上では『協同一致』といふ標語で一致してゐる。これは『ナーシエ・ディエーロ』との協同一致を意味する。言ひかへれば、これは事實上において、『ナーシエ・ディエーロ』がロシアでチハイゼ派の力を藉りて依然として切實な政策と、切實な(ブルジョアに『切實』な)煽動とを大衆の間に行ふことに同意することを意味し、一方外國において、そして違法的に組織委員會一味が『左翼』的口吻を弄したり、似而非革命的文句を案出したりすることに、完全に同意することを意味するのだ。吾々は幻想を抱きたくはない。かのブリュッセル聯盟はバラバラに離散し、それによつて虚偽以外の何物をも擁してゐないことを證據だてたが、しかもこのブリュッセル聯盟はまさにこの故に腐敗せる政治的局面を隠蔽するためにかくも有用なのである。一九一四年七月には『ナーシエ・サリヤ』と『ゼヴェルナーヤ・ラボチャヤ・ガゼッタ』とが、何事にも義務を負はぬ八分通り左翼的な決議で以て粉飾するに役立つた。一九一五年七月にはまだ『盟友の會見』や『議定書』取り交しまでは行つてゐないが、『ナーシエ・ディエーロ』やブレハノフやアクセルロッドが、あれやこれやの八分通り『左翼的』文句で以て排外社會主義の共同隠蔽を行ひつゝある點で、すでに座頭俳優連の原則的一致が成り立つてゐる。一箇年が過ぎた——ヨーロッパの歴史における偉大な艱難